



養蜂家組合



フエフキガエル

眼下に内海を見下ろす高台に、定年退職をした柿ノ倉が引っ越したのは、晩春であった。長く空き家となっていた一軒家で、隣と呼べるような家は近くにはなかった。やがてこの高台も宅地開発をされることになるだろうが、今のところは草木が茂る虫たちの楽園だった。建物は別荘風の洒落た造りで、前の持ち主はこの家で自殺したという。柿ノ倉は不動産屋からその話を聞いて、ちょっと嫌な感じを受けた。しかし、格安であったことと、前々から海の見える高台で暮らしたいという思いが強く、退職金をはたいてこの家を購入したのだ。建物の雰囲気は決して悪くはなかった。周りが自然のままで草花が咲いていたことも独り身の柿ノ倉には心を惹かれた。定年退職をして、自由時間が増え、その時間を散歩などに使いたいと思っていたからだ。これといった趣味を持たない柿ノ倉には、散歩は金のかからない最高の趣味となるだろうと。

不動産屋に案内されて来たときのことだが、中年男の不動産屋は建物の前でこう説明した。「もうだいぶ長いことこの建物の中には人が入りませんでしたから、中がどのようなになっているか正直なところ分からないのです。木造ですから、ひよっとすると白蟻に喰われているところもあるかもしれません」

「白蟻程度なら、後で何とかなるよ。それより前の持ち主はどこでどのように自殺したのかね？」と柿ノ倉は聞いた。

「はい。大変申し上げにくいのですが、その軒に首を吊っていたようです。五年ほど前のことですが、その方は、一人でこの家に住まわれていましたから、家の中では誰にも発見されなかったのでしょうか」

柿ノ倉は、自殺現場が家の中でないだけ、まだマシだと思った。家の中で血まみれで死んでいたのでは、さすがの柿ノ倉も、とても住む気にはなれなかつただろう。格安だったのも、不動産屋は早くこの物件を処理したかったためかもしれない。

柿ノ倉は、自殺した人がどういう人物だったのか気になった。不動産屋が知っているわけもないと思ったが、念のため聞いてみた。

「ちょっと変わった人だったらしいです」と不動産屋は答えた。「ここは隣が遠いですから、近所づきあいもなかったようす。一日中家にいて、たまに散歩をされていたようです。まだ若くて二十代だったと聞いています」

年齢以外は自分とよく似ていると柿ノ倉は思った。自分もそういう暮らしをするだろうから。ただ散歩は朝昼夕と、頻繁にするつもりだった。

家の中は心配していたほど悪くはなかった。木の床でテーブルなどもそのままあった。拭き掃除をして、家財道具を今いるアパートから持ってくれば、すぐに住めるだろう。

柿ノ倉がこの家を購入することを決めたときの不動産屋の表情は、ちょっと説明し難いものだった。驚いたような嬉しいような複雑な表情をした。それはたぶん半ば諦めていたからだろう。こんな気味の悪い家をよく購入する気になったものだと、内心思ったのかもしれない。

住めば都というが、しばらく住むうちに柿ノ倉はこの家での暮らしが気に入ってきた。まず何より静かだった。もちろん小鳥のさえずりは一日中聞こえてくるのだが、気になるものではなかったし、煩わしい人間の姿もここでは見る事がなかった。

柿ノ倉は本を読むのが好きで、数年前から自ら小説を書くようになっていたが、二階の窓から眼下の海を眺めながら、本を読んだり小説を書いたり、まさに理想的な暮らしをすることができた。

そんなある日、誰かが家のチャイムを押したのだ。ここに来てから初めてのことであった。柿ノ倉はビクツとした。誰だろう、こんな辺鄙なところに。そう思いながら柿ノ倉は玄関に出た。

三十歳くらいの小男がそこに立っていた。作業服を着て、手提げ袋を持っていた。男は言った。

「わたくしは養蜂家組合の者ですが、ご主人様に耳寄りなお話を持ってまいりました」

「養蜂家組合！？」柿ノ倉は聞き返した。そんな組合があったのだろうか。「蜜蜂かね？」

「はい。蜜蜂の養蜂家組合でございます。ご存知ないかもしれませんからご説明致しましょう」

柿ノ倉はうなずいた。他のセールスならすぐに断るつもりでいたのだが、もともと昆虫が好きで、前から蜜蜂を飼って自前のハチミツをパンにつけて食べたりする生活に憧れを持っていたのだ。もっとも、この時点では男が何の目的で来たのかは分からない。単にハチミツを売りに来ただけかもしれない。

男は手に持っている袋から、パンフレットを取り出して、それを柿ノ倉に見せた。柿ノ倉は前のめりでそれを見た。パンフレットには、蜜蜂とその棲家となる木の箱が図に描かれていた。

男は言った。

「ここに描かれている木の箱一つにですね、数千匹の蜜蜂がいます。そして、この蜜蜂は西洋蜜蜂ではありません。日本蜜蜂です。今、市販されているハチミツのほとんどが西洋蜜蜂によってなされたものです。西洋蜜蜂は愛護されてきました。それなのに日本蜜蜂は、まったく誰からも相手にされてきませんでした。そのため日本蜜蜂は次第に西洋蜜蜂にテリトリーを奪われ、数を減らしているのです。このままですと日本古来の日本蜜蜂は消滅するかもしれません。そこでわたくし共は、日本蜜蜂の擁護及び繁殖を目的とする養蜂家組合というのを結成したのでございます」

柿ノ倉は興味を持った。日本蜜蜂という存在を以前から知っていたし、西洋蜜蜂に追いやられている話も聞いたことがある。

「で、ご用件は？——」と柿ノ倉は聞いた。男の用件を早く知りたかった。

「はい。率直に申しますと、ご主人様に日本蜜蜂を飼っていただきたいのです。飼うと言いましても、まったく手間が要りません。蜜蜂が自分たちでちゃんと暮らしていきますから、その棲家となる巣箱をこの家の敷地内に置いていただければ、それで結構なのです」

「蜜蜂がその針で人間を刺すということはないのかね？」

「まずございません。人間の方からちょっかいを出さなければ、蜜蜂の方から攻撃してくることはないと申し上げます。確かにたくさんの蜜蜂が飛び交いますから、最初のうちは怖いと思いますが、すぐに慣れます。箱の蓋を開けたりしなければ、蜜蜂が人間を襲うことはないでしょう」

「しかし、それじゃあハチミツを取ることができないじゃないか？」

「それはこちらにお任せください。定期的に箱の点検にまいります。そして、ハチミツが貯まればそれを瓶に入れて、ご主人様に差し上げます」

「ほう、それは嬉しいことだが-----しかし、金がかかるのだろう」

「いえ、皆さん、そのことをご心配されますが、わたくし共養蜂家組合は、金儲けが目的ではありません。あくまでも日本蜜蜂の繁殖を目的としていますから、お金は一切いただきません。ただ箱を置く場所を提供していただければ、それで結構なのです。敷地のどこでもかまいません。邪魔にならないところに置いていただければ、わたくし共は感謝いたします。この周りは草花が咲き、花の咲く樹木も多いですから、これ以上ないほどの好条件なのでございます」

柿ノ倉はすぐに承諾した。以前から蜜蜂を飼ってみたいと思っていたわけだから、渡りに船である。

「それではご契約書にサインをお願いいたします」

「本当にタダなんだね」と柿ノ倉は念を押した。年金生活をしていくわけだから、お金は必要最低限にとどめなければならなかったのだ。

「タダでございます」と男は言った。「ご主人様のご負担はまったくございません。ハチミツを楽しみにしていただければ、こちら嬉しゅうございます。日本蜜蜂のハチミツは西洋蜜蜂とは一味違いますから-----」と男はニコリと笑った。

どのように違うのか柿ノ倉は聞こうと思ったがやめた。それは今後の楽しみということにした。

「では後日、日本蜜蜂とその巣箱を持って参りますから、よろしくをお願いいたします」

「一箱だけなんだろうね」と柿ノ倉は慌てて聞いた。たくさん置かれては、かなわないからだ。

「最初は一箱ですが、そのうち分蜂のためにもう一箱置かせてもらいます。そして、この新しい箱に新しい女王蜂が移り住んで、ある程度蜂の数が増えれば、これをまた別のところに持っていきます。これが目的です」

「なるほど、そうやって日本蜜蜂を増やしていくわけだね」

柿ノ倉は納得した。契約書にサインした。

「これでご主人様も、養蜂家組合のメンバーとなりました。いえ、メンバーとなったからと言って、別に会費がかかるわけではございませんから、ご安心ください。今後、日本蜜蜂の擁護者として社会に貢献されてゆかれます。これは会員証です」

と、男は手提げ袋からA4版の紙を柿ノ倉に手渡した。——養蜂家組合は、貴殿を日本蜜蜂の擁護者と認定し、これを委託いたします。——とかなんとか書いてあった。社会に貢献できるかどうかは別として、柿ノ倉は果樹なども庭に植えたいと思っていたから、そばに受粉の手助けをしてくれる蜜蜂がいるというのは心強いものがあった。

男は礼を言って去っていったが、このとき柿ノ倉は、わざわざ玄関の外に出て見送った。というのは、柿ノ倉は男が家に来たとき、車のエンジン音、またそのドアを閉める音を聞かなかった（この静かなところで、車が来れば、二階にいた柿ノ倉の耳に届かないわけがなく、またチャイムが鳴ったとき、窓からちらっと見たのだが庭には自分の車しかなかった）こんな辺鄙なところにどうやって来たのだろう、と不審に思ったからだ。あるいは離れたところに車をとめているのかもしれない。山道を去る男の後ろ姿を見つめながら、柿ノ倉は、強いて男の後を追う気にはなれなかった。それは以前から蜜蜂を飼いたいと思っていたところへ、向こうから好条件で来てくれたのだ、どこから来ようというではないか、と思ったからだ。

3

数日後、再びあの男がやってきた。今度は一輪車を押して来た。一輪車の上に四角い箱が網に包まれていた。これが蜂の巣箱だろう、網の中で蜜蜂がうごめいていた。

「この前お話しいたしました日本蜜蜂でございます。どうかご主人様のお好きな場所に置いていただきたいと思います」

柿ノ倉は、雨の当たらない軒下に置こうと言ったが、男は「それもいいのですが、それですと蜂が家の中に入り込む恐れがありますから、やはり庭の隅に置かれるのがいいかと存じます」と答えた。

「でも、大雨のときは箱の中がべちょべちょにならないかね？」

「そのためにビニールシートとその重しとなるレンガをちゃんと用意してあります。もちろん台風のアとは様子を見に来ますから、ご主人様は何も心配はいりません」

改めて平底の一輪車を見れば確かに巣箱の他にビニールシートとレンガが数個載せてあった。それだけでなく長さ四十センチ、太さ十センチ程度の丸太も二本載せてあった。

「じゃあ庭の隅に置いてもらおうか」と柿ノ倉は言った。

「かしこまりました」

男は言って、一輪車のハンドルを握った。柿ノ倉は自ら先にたって、庭の隅を指定した。男はそこに二本の丸太を置いた。

「木の箱を直接地面に置きますと、下の方から腐っていきますから、こうして空間を作るのです」と説明した。

男はその丸太の上に巣箱をそっと載せた。そして、網の覆いをはがすと、日本蜜蜂がいっせいに飛び交った。

柿ノ倉は思わず手で顔を覆った。

「ご心配いりません。この蜂が人間を襲うことは通常ありませんから。ただ巣箱の蓋を開けたりしないでください。たまにあるのですが、会員の方が、ハチミツがどのくらい溜まったかと箱を開けたときに、刺されることが。蜂が人間を襲うのは、あくまでも箱の中にいる女王蜂や幼虫を守るための防衛本能です。箱から離れて飛び交っている蜂に、そういう本能は惹起されません。ですから、巣箱は家から離れた方がいいのです。庭の片隅なら、まったくもって問題ありません」

話を聞いて柿ノ倉は、この男に好意を寄せるようになった。男が設置をすんで帰るときに、お茶でも飲んでいかないかね、と声をかけた。

しかし男は、「今日は忙しいので-----」と一輪車を押して帰っていった。

柿ノ倉は、今時珍しい殊勝な人だなあと感心しながら、男の後ろ姿を見ていたが、しかしすぐに、いったい男は一輪車を押して、どこへ帰るのだろうかと思議に思った。仮に離れたところに車をとめていても、ならばなぜ車を家の庭につけなかったのか、車が通れる道幅はあるのだから、わざわざ一輪車に積み替える必要はないのだ。

今度こそ男の後をつけなければならぬと、柿ノ倉は男の去っていった方向へ忍び足で歩いていった。男は林の中の道を、後ろを振り返ることもなく歩いていた。やがて道が枝分かれをし、さらに細い道の方を男は進んだ。柿ノ倉は不審に思った。というのは、柿ノ倉は日々の散歩で、よくこの辺まで来るのだが、この向こうは確か崖になっていたように思うからだ。

周りに熊笹などが生い茂った小径をしばらく進んだ頃、男の姿が急に見えなくなった。どこかに入り込んだようだ。すると近くの木立の間から青いテント小屋が見えてきた。柿ノ倉は立ち止まり、それ以上近づくことは控えた。あの男がそこにいたからだ。男は一輪車をテント小屋の横に立てて、小屋の中に入ろうとしていた。

柿ノ倉は引き返した。頭の中が混乱していた。養蜂家組合というのは、いったい何なんだろう。あれがその拠点なのだろうか。会員証まで発行しているというのに。もっとも、その会員証はコピー用紙に印刷したものだったが。

柿ノ倉は、このときふと前の住人が自殺していることを思い出した。その自殺もこの養蜂家組合と何か関係があったのではないか、という気がしてきたが、別に根拠があるわけではなかった。

また、養蜂家組合というのがいつ結成したのか、いつからあのテント小屋があるのか、そして、前の住人も養蜂家組合の会員ではなかったのか、といったことを矢継ぎ早に考えたが、柿ノ倉は、前の住人が、一人で生活をしていたことといい、どうも自分と重なるようで急に不安になってきた。

さっき柿ノ倉がちらっと見た限りでは、あのテント小屋には電気も水道もないようだが、もちろん、宅地開発されていない山に、そんなものがあるわけがない。であれば住居ではなく単なる物置なのかもしれない。物置であれば、この周辺は自然のままだから、蜜蜂の需要も多く、蜂の巣箱を保管するにはもってこいだろう。が、だとしても-----と、さらに疑問点が柿ノ倉の頭に浮上した。住居ではないとするとあの男はこの後、どこへ帰るつもりなのだろうか。バス停がある市道に出るまで四キロほど離れているのだ。自転車もないようだし——もっとも、この高台の下が海沿いの細長い町だから、そこの住人であれば徒歩であっても不思議はない。が、それでもこの高台は急斜面だから、上がり下りをするには、かなり遠回りをする必要があった。

柿ノ倉は今後、あのテント小屋がある細い道は避けなければならないと思った。ぼったりあの男と会って、気まずい思いをしたくないからだ。とはいえ、蜜蜂のいる生活は、なかなか楽しいものだった。蜜蜂はそこかしこ飛び交っているが、他の蜂のような恐怖感はなく、むしろ一生懸命に花粉を集めている姿に感動すら覚えた。

すでに述べたように、柿ノ倉は年金生活者の気楽な身分である。毎日、本を読んだり小説を書いて過ごしているが、二階の書斎の窓から、庭の片隅に置いてある蜂の巣箱をときどき眺めるのが好きで、これほど手間のかからない、そして希望を与えてくれるペットは他にないままで気に入っていた。

そんなある日、例の男が巣箱を見にやって来た。挨拶もなく、箱の蓋を開けて中を調べていた。二階の窓から、柿ノ倉はその様子を眺めていたが、よっぽど慣れているのか、男は頭にネットも何も被っていなかった。やはり専門家はちがうと柿ノ倉は感心した。

男はすぐに帰っていったが、柿ノ倉はもう男に対して余計な詮索はしないことに決めた。律儀に蜂の巣箱の点検に来たのだ。金も取らず、これほど真摯に対応するセールスマンが他にいるだろうか。

そしてこれ以降、男は近いこともあるのだろうが、一週間に一度の割合で、巣箱を見に来た。だいたい昼間で、すぐに帰るのだが、ある日のこと男は珍しく巣箱の前にしゃがみ込んでメモ帳に何か記入していた。柿ノ倉はその様子をいつもの二階の窓から眺めていたのだが、気になったので降りて行って聞いてみようかと思った。しかし、元来人付き合いの悪い柿ノ倉は、あえて尋ねることはしなかった。用事があれば向こうの方から言ってくるだろう、と安気に構えていた。はたして男は、帰り際に家のチャイムを押した。柿ノ倉は、待ってました、とばかりに二階から駆け下りた。

男は、上機嫌でドアの前に立っていた。

「ご主人様、今日は嬉しいお知らせをいたします」と男は言った。

「嬉しい知らせ!？」

「さようでございます。新しい女王蜂が誕生いたしました。近いうちに分蜂いたします。それで以前お話ししましたように、もう一箱、あの箱の横に置かせてもらいたいと存じますが、よろしいでしょうか？」

「それは構わんよ。置いたらいい。で、ハチミツの方はどうかね？」

柿ノ倉はそのことが一番気になっていた。

「はい。順調に溜まっているようです。後三ヶ月ほどお待ちください。そうしますと市販されている瓶と同じくらいの量が取れるでしょう。全部を収穫することはできません。というのは、蜂のために三分の一は残すようにしていますから」

柿ノ倉は、このときほど蜜蜂を愛おしく感じたことはない。自分のために毎日せっせと花粉を集めているのかと思って。

「それは楽しみだね」と柿ノ倉は言った。

「はい。今の時期田んぼに蓮華草が一杯咲いていますから、その花粉から作られるハチミツは格別美味しゅうございます」

柿ノ倉は、トーストした食パンにそのハチミツを塗って食べるのを想像して、思わず微笑んだ。

「では後日、箱を持ってまいります」と男は言って帰っていった。

柿ノ倉は、去っていく小男が、まるで福の神のように感じた。それは誇張ではなかった。娯楽の乏しい自分の生活に日々の楽しみを持って来てくれたのだ。これが福の神でなくて何であろう。また柿ノ倉は、自分のためにせっせと働いてくれている蜜蜂に、何か花の咲く植物をプレゼントしようと思った。敷地に植えるのだ。花をたくさんつける果樹がいい。しかも、あまり大きくならないのがいい。なぜなら、高木になる木は、二階からの視界を遮る恐れがあるからだ。眼下の景色を眺めるために、あえて事故物件と知りながら購入した家なのだ。その美点を損なってはなんにもならない。そこで柿ノ倉は、いろんな果樹を頭に思い浮かべた。そして、その条件に適ったのは、ブルーベリーだった。これなら庭に植えても邪魔にならない。白い小さな花を一杯咲かせ、実を食べることもできる。ジャムにしたっていい。ハチミツとブルーベリーのジャム、この二つが自家製となれば、なんとなく洒落た感じになる。文化人を気取っている柿ノ倉には、ちょうどいいアイテムになるだろう。柿ノ倉は、明日にでもホームセンターへ行って、ブルーベリーの苗木を購入することに決めた。

翌日、早速柿ノ倉は自分の車で、最寄りの、と言っても八キロほど離れているが、ホームセンターへいった。建物の外に、鉢物の植物や果樹の苗木がたくさん置かれていて、人気の高いブルーベリーの苗木も当然あった。そのそばに温州みかんの苗木もあり、ちょうど白い小さなつぼみをたくさんつけていた。それで、柿ノ倉はこれも一つ購入することにした。ブルーベリーは三月から四月にかけて花が咲き、温州みかんは五月である。一年中何かの花が咲いていれば、庭が華やいである。取り敢えず柿ノ倉は、ブルーベリーと温州みかんの苗木を一本ずつカートに載せて、レジに向かった。そのとき、柿ノ倉は、見知らぬ男から声をかけられた。

「そのブルーベリーはラビットアイという種類ですよ」

柿ノ倉は驚いて男の顔を見た。まだ二十代だが、逞しい体をして麦わら帽子をかぶっていた。

「そうですか。で、それが-----」柿ノ倉は、この青年が何を言いたいのか分からなかった。

「ラビットアイ系は、一本だけでは結実しないのです。すでにラビットアイ系をお持ちならいいですが、そうでなければ同じラビットアイ系で別の品種を同時に植える必要があるのです」

「なるほど、そういうことだったのかね。これはどうもご親切にありがとうございます。ではもう一本苗木を追加することにしよう」

「いえ、差し上げます」

「えっ！」柿ノ倉は思わず声が出た。

「僕の家にはブルーベリーがたくさんありますから、よろしければ何本でも差し上げます。じつはブルーベリーは、挿し木で簡単に増えるのです。趣味で増やしたのですが、今では増えすぎて、困っています。というのも現在、僕はもう一つの種類、ハイブッシュ系の方に嵌ってしまっていて、こちらを増やしているからです。スペースが限られていて、ラビットアイ系は、半分くらい処分しようと思っていたところです。しかし、捨てるのも何ですから、欲しい方にお分けしているのです」

「それではお言葉に甘えて分けてもらえるかね」

「ええ、どうぞどうぞ。では僕の車の後について来てください」

柿ノ倉は、カートに載せている品物をいったんレジで購入し自分の車に積むと、青年の軽トラの後について車を走らせた。運転しながら柿ノ倉は、養蜂家組合といいこの青年といい、世間は意外と親切な人がいるものだなあと感心した。

青年の車は、柿ノ倉の住む高台の裾の方に向かっていった。柿ノ倉は、この青年が麦わら帽子をかぶり軽トラを運転するところから、農家ではないかと推測していたが、案の定農家だった。周りは田んぼだらけで、まだ田植え前のことだから、一面に蓮華草が咲き誇っていた。赤い絨毯とはよく言ったものだ。この辺の蓮華草の花粉を、うちとこの蜜蜂は集めているのだろうか、柿ノ倉は思わず目を細めた。

青年が庭先に軽トラをとめると、柿ノ倉もその横に車をとめた。

降りて見ると、庭一杯にブルーベリーの苗木が置かれていた。ホームセンターよりもはるかに数が多かった。まるでブルーベリーの専門農家のような感じだったが、しかし青年は、あくまでも趣味でやっていると言う。確かにブルーベリーの専門農家がタダで苗木を人に譲るわけがなかった。

「こっちにあるのがラビットアイ系ですから、好きなものを選んでください」と青年は指差した。苗木にはどれも名札がついていた。品種によって味も大きさも違うのだろうが、門外漢の柿ノ倉には、どれを選べばいいのか分からなかった。ホームセンターに置いてあるブルーベリーの苗木には、一本一本実のついた写真が添えられていたが、さすがそういう配慮はない。取り敢えずホームセンターで買った苗木とは、別のラビットアイ系を選ぶ必要があった。できるだけ実の大きくなるものを柿ノ倉は選びたかった。で、「この中で一番実が大きくなるのはどれかね？」と聞いた。

すると青年は答えた。

「ラビットアイ系は、あまり大きくはならないですが——強いて言えば〇〇ですかね、この中で一番大きい実をつけるのは。そこにあります」

と青年が指差した方を見ると、確かに〇〇と書いた名札が苗木にぶら下がっていた。と、その横にどこかで見たような箱があるのに柿ノ倉は気づいた。すぐに、柿ノ倉の庭に置いてある蜂の巣箱と同じものであることが分かった。こちらビニールシートが箱の上に被せられていて、よく見れば日本蜜蜂がそこらじゅう飛び交っていた。

柿ノ倉は言った。

「ここも養蜂家組合の人が来たのかね？」

「養蜂家組合……ええ、来られました。そこに蜜蜂の巣箱を置いていかれたのですが、こちら也大いに助かっていますよ。というのは、農家というものは稲作などは別として、果樹をやっているところは蜜蜂がいないと仕事になりませんからね。いえ仕事の量が増えるのです。自分でいちいち受粉作業をしなければならないからです。僕のところはビニールハウスでイチゴの栽培をやっています、以前は自分たちで受粉作業をしていましたが、今は蜜蜂に頼りきりで、楽なものですよ。普通はお金を払ってシーズン中だけ蜜蜂を借りるのですが、養蜂家組合に入ればそれが無料なんですから」

「やはり来たかね」と柿ノ倉は言った。「じつは私のところにも来てね。庭の片隅に巣箱を置いていったのだが、今日ホームセンターでブルーベリーや温州みかんの苗木を買ったのも、その蜜蜂のためなのだ。私の家はあの高台にあって、まだ引っ越して間がないのだが」と柿ノ倉は指差した。

「そうでしたか。近いですね。なんなら僕が苗木を植えるのを手伝いましょうか？」

「いや、そこまで頼みすることはできないよ」と言ったとき柿ノ倉は、スコップを持っていないことに気がついた。ホームセンターで買うべきだったのだが、思いつかなかったのだ。

柿ノ倉は笑いながら、「スコップを買うのを忘れていたよ。今あなたが植えると言ったので気づいたのだが、これからまたホームセンターにいったって買ってこよう」

「ですから今回は私がお手伝いをしましょう。スコップはまた次の機会に買われたらいいでしょう。じつは僕の土地があの高台にありまして、そこにシイタケの原木を置いているのですが、そろそろ見に行ってみようかと思っていたところです。そのついでです」

「そうかね。では頼みするとするかね」

青年は笑顔になり、「苗木は僕が適当に選びましょう。ブルーベリーは大きくはなりませんし、剪定も簡単ですから、四、五本軽トラに積んでいきましょう」

「そ、そんなに……二本程度でいいよ。まだ他の植物も植える気にいるから」

「では二本、実の大きくなるやつを選んで、持っていきましょう」

青年は鉢植えにしているブルーベリーの苗木を二本選んだ。その素焼きの鉢をコンコンと地面に叩いて苗木だけを抜くと、線毛のような細かい根がびっしりとつまっていて、鉢の形が崩れていなかった。それを軽トラの荷台に積むと、今度は剣先スコップとタケノコ鍬を積み、「さあ行きましょう」と柿ノ倉に声をかけた。柿ノ倉はうなずいた。

柿ノ倉は自分の車に乗り込むと、バックミラーで軽トラを確認しながら、高台の我が家へと向かった。

家に着くと、柿ノ倉はどの辺りに植えるのかを指定した。庭の周りは雑草だらけで、どこに植えても大丈夫そうだったが、一応自分の敷地内に植えるつもりでいた。結構広い敷地なのだ。

「僕が土を掘りますから、あなたはバケツに水を汲んで用意しててください」と青年はタケノコ鍬を手にして言った。スコップではなくタケノコ鍬を手にしたのは、庭の地面が固かったため、ツルハシのようにして土をほぐすのだ。

さすがに農業青年は手慣れたもので、あっという間に全部の苗木を植えた。柿ノ倉自身も途中からタケノコ鍬を使って地面を柔らかくするなどしたが、いずれにしても柿ノ倉は、汗をかいて手伝ってくれた青年に対して好意を抱いた。

「ちょっと家に入ってコーヒーでも飲んでいかないかね」

と柿ノ倉は言った。

「そうですか。じゃあお言葉に甘えて——」

柿ノ倉は青年をリビングに通した。殺風景な部屋で、小さなテーブルと座椅子が一つあるのみだったが、それはまさか人をこの家に招こうとは思わなかったから、一つしか購入しなかったのだ。

「その座椅子に座って……」と柿ノ倉は言った。

柿ノ倉はキッチンで湯を沸かし、インスタントコーヒーを作った。それを盆に載せリビングにいる青年のところに持っていった。

テーブルの上には、細長い小袋に入ったシュガーの容器が常に置いてある。

「ミルクはないんだが、そのシュガーを好きなだけ入れて——。コーヒーは好きな方かね？」

「これはどうも、——私はコーヒーに目がないもので、一日に五、六杯は飲みますね」

「そう、それは良かった。私もコーヒーが好きで、その反面アルコールの方はさっぱりダメだがね」

ふと窓の外に人影が映った。見ると例の養蜂家組合の人だった。分蜂のための巣箱を持って来たのだ。この前のときのように一輪車にそれを載せていた。

「養蜂家組合の人でも大変だね。巣箱を持って来られたよ」と柿ノ倉が言うと、青年も窓の外を見て、

「あの人は律儀な人ですよ。私とこのイチゴハウスは三棟あるのですが、その三棟ともに巣箱を置いてくれました。そしてしょっちゅう蜂の様子を見に来てくれます。それでお金は一切受け取りませんからね。農家にとっては神様のような人です」

「コーヒーでも勧めてみようかな」と柿ノ倉は言った。

「たぶん飲まないと思います。私もあの人には、たびたびコーヒーやお茶を勧めたのですが、一度も応じてくれませんでしたから。休憩もせず、いつも忙しそうに帰ります」

「いつも歩いてくるのかね？」

「ええ、今日みたいに、一輪車を押してくることもありますが、だいたい歩いてきますね、手提げ袋を持って」

柿ノ倉は、ふとこの前の青いテント小屋を思い出して、あそこから歩いていくのだろうか、と想像して、ため息が出た。けっこう距離があるからだ。また徒歩ともなればそれだけ時間がかかるわけだから、それで経営が成り立つのだろうか、と不思議に思った。もっとも、金儲けではなく日本蜜蜂を増やすのが目的なのだろうが。それにしても諸経費がかかるだろうし、それはどうやって賄っているのだろうか。徒歩であればガソリン代は不要だとしても、腹は空くし、巣箱を作るにしたって、その板を購入する必要があるだろう。まさかそこら辺の木を切って板にすることもないだろう。仮にそこら辺の木を切り倒して巣箱を作るにしても、釘は買わなければならないから、まったく金がかからないわけではないはずだ。しかし、柿ノ倉は考えた。こういうものは篤志家がいって、その支援で成り立っていることが多いものだ。おそらく養蜂家組合も、そういう篤志家が何人もいて、いや、一人でも金持ちがいれば、あの男一人ぐらい十分養っていけるだろう。

養蜂家組合の男は、新しい巣箱を設置すると、そそくさと帰っていった。

柿ノ倉は言った。

「あの人も車を使わず大変だね。ところで君は、彼がいったいどこから来て、どこに帰るのだろうか、と疑問に思ったことはないかね？」

「そう言えばそうですね。今まで考えたこともなかったですが、確かに不思議です」

「じつは私は以前、あの人の後をつけたことがあるのだよ。いや何、別に悪気があったことではない。こんな辺鄙な山の上に、わざわざ一輪車を押して来るのは大変だろう、きっとどこかに車をとめているに違いない、しかし、それではなぜここまで車で来なかったのか、と疑問に思っていたことなのだ」

「で、どうでした？」

「ここから数百メートル離れた山の中に青いテント小屋があってだね、そこに彼は入っていったよ」

「ほう！」青年は驚いたように言った。「この山の中に事務所があるのですか？」

「事務所かどうか、単なる物置のような感じが私はしたがね」

「で、どの辺りですか？」

そこで柿ノ倉は指差した。

「あっちの方角に五百メートルほどいって、そこからさらに細い道を進んでいくうちに樹木の間からテント小屋が見えてくるよ。かなり奥まったところにあるから普通に歩いていたら、たぶん気づかないと思う。じっさい私はそれまで何度かその辺りを散歩したのだが、彼の後をつけて初めて小屋があるのが分かったくらいだ」

青年は言った。

「その細い道をずっといけば、獣道のようになってやがて崖になっていませんか？」

「そう。だから私は、彼がこの細い道を進んで行ったので、あれっと思ったのだ」

「おかしいですね。あの一带はうちとこの山なんですよ。この反対側の斜面に椎茸の原木を置いているのです。崖の方は何もありませんから、ここ何年も行ったことがありませんが」

「君の山だったのかね」今度は柿ノ倉が驚いて言った。「じゃあ彼は無断であそこにテント小屋を建てたというわけかね」

「そうなりますね。これはちょっと気になりますね。一言断ってくれば、私も養蜂家組合の趣旨に賛同していますから、許可したのですが.....無断ですと黙っているわけにもいかなくなります」

「じゃあ彼の後を追ってみるかね？」

「はい。確かめる必要があります」

ということで、柿ノ倉と青年は外に出て、養蜂家組合の男の後を追った。柿ノ倉はすでに場所を知っているから慌てることはなく、また男に接近し過ぎて気づかれるのもよくなかった。会話はあのテント小屋の前でする必要があったから。男はやはり振り返ることもなくどんどん進んだ。間もなく、男が細道から脇にそれて、青いテント小屋が見えてくると、柿ノ倉は青年の方を振り向いて、指差した。

青年は言った。「確かにテント小屋がありますね。知りませんでした。あの人が初めて私のところに来たのが、五年ぐらい前になりますが、それ以前にはあの小屋は無かったように思います。もちろん、くまなく点検したわけではないですが、私はキノコを取りにこの辺に来たことがありまして、そのときは無かったです」

男がテント小屋に入るのを見て、柿ノ倉と青年は早足に近づいた。そして小屋の入口で、青年が声をかけた。

「すみません。養蜂家組合の方、ちょっと外に出て来ててください。お話があります」
間もなくあの小男が現れた。怯えたような顔をして、二人を見た。「何でしょうか？」

青年は言った。

「じつはこの山はうちとこのものなのです。断りもなく小屋を建てられたら困りますね」
「そうでしたか、それは大変申し訳ございませんでした。どなたの山なのか分かりませんでしたし、また広い山の中のほんの一点ですから、ご迷惑が掛からないと思ったのです。しかし、確かに無断で小屋を建てたのは悪いことです。謝罪いたします」と男は頭を下げた。

青年は急に笑顔になった。「いえ、謝る必要はありません。最初に断ってくれていれば、僕は喜んで許可していたでしょう。僕はあなたのしていることを高く評価しています。この辺の農家の人たちは、みんなそうだと思いますが、あなたのことを神様のように崇めていますよ」

男は妙な笑い方をした。「神様だなんて、そんな、わたくしは日本蜜蜂のためにしていることです」

「それで僕たち農家は助かっているのです。面倒な受粉作業を省くことができ、なおかつハチミツが貰えるのですから」

「喜んでいただければ幸いです。わたくし共養蜂家組合としましても、メンバーの方々のご協力があればこそ、安心して巣箱を設置できるのです。御蔭さまで日本蜜蜂は徐々に増えています」

「ところで」と柿ノ倉が言った。「この小屋の中には何があるのかね？」

すると男はまた妙な笑い方をして、「ただの倉庫ですよ。巣箱などを置いています。また、ここで巣箱を作ったりもしています」

「ここで寝泊りはしていないのかね？」

「しないこともありませんが、山の中ですから、電気も水道もありませんし、何日も泊まることは難しいです。遅くなって帰るのが億劫になったときに、朝までいることはあります。わたくしの仕事は時間があつてないようなものですから、昼も夜も関係ありません。日本蜜蜂を増やすこと、それだけがわたくしの仕事です」

「しかし、収入はあるかね？」

「仕事自体は一銭も儲けがありません。むしろ費用がかかります。しかし、スポンサーがいますから、何とかやっています。その方にわたくしは雇われているのです。その方はこの地方でも指折りの富豪でして、ある会社を経営しています。じつはわたくしはそこの社員でしたが、社長からこの仕事をするように頼まれました。社長は根っからの昆虫好きで、とりわけ日本蜜蜂に愛着があるようです。なんでも昔、家の近くに日本蜜蜂が巣を作っていたのですが、勢いのある西洋蜜蜂に追われていなくなったそうです。同じ蜜蜂といっても日本蜜蜂と西洋蜜蜂とは、犬猿の仲でして、体格のいい西洋蜜蜂の方が、どうしても勝利するようです。このままですと日本古来の日本蜜蜂が日本からいなくなってしまうと、社長は懸念され、そして養蜂家組合なるものを設立し、わたくしをその責任者にしたのでございます。わたくしはお恥ずかしい話ですが、この歳になってもまだ独身ですから、適任だと社長は考えたのでしょう。わたくしも蜜蜂に限らず虫は好きですから、すぐに承諾しました。まず手筈目に地元で日本蜜蜂を増やそうとこの山を選んだのですが、それはこの辺りに花の咲く草木が多く茂っていることと海が見えるからです。海が見えなければ話になりません」

男は、この山にテント小屋を建てた言い訳で、そのように言ったのだろうが、柿ノ倉は興味を持った。先ほど柿ノ倉が考えた、養蜂家組合には支援する篤志家がいるのではないかという予想は的中したのだが、海が見えなければならぬ、というのは思いつかなかった。で、柿ノ倉はたずねた。

「なぜ、海が見える必要があるのかね？」

「はい。それは社長の経営している、といっても趣味でしているのですが、釣り船を見る必要があるからです」

「釣り船と蜜蜂と、どういうツナガリがあるというのかね？」

「はい。釣り船は決まったポイントで船を停めます。いわゆる潮の流れで魚は移動していますから、朝昼晩と釣れるポイントは違ってきます。蜜蜂も太陽の動きで朝昼晩と花粉を採取するポイントが違ってくるのです。太陽が羅針盤の役割をしているのです。太陽光線がどちらの方角からやってくるか、それで今いる位置を確認するらしいのです。ですから雨の日はもちろんですが、曇った日も蜜蜂はあまり遠くに飛んでいきません」

柿ノ倉は、男の話をじれったく聞いていた。それは柿ノ倉がした質問の答えになっていないからだ。柿ノ倉は釣り船と蜜蜂とどう関係があるのか、と聞いたのであって、共通点を聞いたのではない。で、さらに聞くと、

「決められた時間に海を眺めることになっています」と男は答えた。「釣り船から合図が送られてくるのです」

「どんな合図だね？」

「はい。懐中電灯の明かりです。こちらの方角に向かって照らします」

「で、それは何のための合図だね？」

「それは秘密です」と男は即座に答えた。「社長に言われたことをしているだけです」

「しかし、ここからだ樹木が邪魔をして海が見えないようだけど……」と今度は青年が言った。

「ええ、ですからこのちょっと先にいったところに崖がありまして、そこにいて海を眺めているのです。内海全体を見渡すことのできる絶景ですね、あそこは——」

「確かにあそこは素晴らしい場所です。昔僕はあの崖の上でキャンプをしたことがあります。ただ海で泳ぐには遠すぎますがね」と青年は言って笑った。

柿ノ倉が、唐突に言った。

「ところで失礼だが、あなたがおられたという会社は何の会社だったのかね？」

すると男は、一瞬ひやとしたような顔をしたが、すぐに答えた。「商社ですよ。いろいろなものを商っています。食料から衣料、肥料、家庭内のすべてのものです。国内だけではなく貿易にも関係しています。近くの港から四国に向かうフェリーも見えますが、毎日のようにうちの会社の車そのフェリーに乗っています。デパートや小売店に納入するためです」

「じゃあ、あなたもそういう仕事をされていたのかね？」

「いいえ、わたくしは経理の方ですから、車の運転はしません。というか車の運転ができないのです。自転車も苦手です、とにかく歩くしか能のない人間です。歩くことなら誰にも負けません。一日中歩くこともできます」と男は、足踏みをした。

「社長というのは、よく釣りをするのかね？」と柿ノ倉は聞いた。

「ええ、よくしますよ。大きな釣り船を持っているくらいですから。専門の船頭さんを雇ってまして、一般の釣り人も予約制で乗せています。夏になれば一杯になりますよ」

「だが夏は日差しがきつくて、船の上にいるのは大変だろう」

「いえ。ちゃんと屋根があります。といっても簡素なものですが、釣竿が邪魔にならないように船の中央に低く設えてあります。投擲したあと、かかるまでその中で待つのです。なかなか快適ですよ」

「それにしても決まった時刻に懐中電灯で、あなたに何を知らせるつもりなのだろう？」と柿ノ倉は、聞くとともに口にすると、男は仕方ないといった感じで、

「たぶん、船の居場所でしょう」と言ったが、でたらめであることは、その笑顔で分かった。柿ノ倉はちょっとムツとして、

「船の居場所だって！？そんなものを教えて、どうなるというのだね。登山でよくここにいるぞーと手を振ることはあるが、釣り船はないだろう。しかし考えれば、日本蜜蜂といい、その社長といい、ちょっと変わったところがあるようだね、気に入ったよ」

男は少し、ほっとしたようで、

「とにかく社長は、社会に貢献したいという考えを持っておられまして、釣った魚も多くはすぐに海に戻しますし、施設にプレゼントすることもあります。その施設というのは、社長の会社が経営している知的障害者の施設なのですが、この海の近くにありますが、それでよく施設の人たちを釣り船に招待して楽しませていますよ。じつは社長の子供がやはり知的障害者でして、それでこの施設を建てたのですが、今では公の施設より評価が高くなっています。特に食事が星つきレストランなみだともっぱらの評判です。それもそのはず腕のいい料理人を雇ってまして、社長も夕飯は、たいていそこで食べているようです。じつは社長は、レストランも何軒か持っていますから、そこから交代で料理人がやってくるのです。まずいわげがありません」

柿ノ倉は自分の貧相な食事を思い浮かべて、羨ましくなったが、しかし、今の気楽な生活に十分満足ではあった。

「このことは、いえこのテント小屋のことですが——」と男は、青年の方を見て言った。「この山の所有者が現れたということ、社長にご報告いたしまして、今後借地料を毎月お支払いしたいと思いますが、どうでしょうか？」

「借地料……別にいいですよ。これより広くならなければ、僕とこは蜜蜂に大いに助けられていますから、ウインウインの関係です」

「そうですか、そう言っていただければこちらも嬉しゅうございます」

「しかし、車を使わないのなら、大変手間がかかるだろう」と柿ノ倉が聞いた。

「かかります。ちょっとしたものを買うに行くにも歩いてですから。しかし、歩くことが仕事だと考えています。また歩いていると、日本蜜蜂の数が増えているということがよく分かります。頻繁に見かけるようになりましたから。養蜂家組合としましても、嬉しいかぎりです。彼らは、いえ蜜蜂のことですが、私にとてものなついでにしまして、私が手で合図をすれば犬のように集まってきますよ」

「ほう、そんな手品のようなことができるのかね」

「ええ、わたくしの体に蜜蜂のニオイ、たぶん女王蜂のニオイが染み込んでいるのでしょう。女王蜂はローヤルゼリーを食しますが、そのローヤルゼリーが毎日のように巣箱を素手で点検するうちにわたくしの体、あるいは服についていたのでしょう。実際作業服を洗濯した翌日は、わたくしに集まる蜂が極端に少なくなるのです。そればかりか作業中、刺されることもありました。それで、わたくしは最初のうちはローヤルゼリーを、わざと服につけていました。しかし今では、そんなことをする必要はありません。彼らは、わたくしを自分の親か何かのように考えているようで、上半身裸で作業しても、刺されることはありません」

「だからいつもネットも被らず、作業をしていたのだね。プロは違うな、と感心しながら見ていたよ」

今度は青年が言った。

「ですが歩いて回っていたのでは、行動範囲が限られてくるでしょう」

「ええ。しかしわたくしには、ありがたいことに社長の部下が必要なときに手伝ってくれます。遠くにいくときは車に乗せてもらっています。たとえばホームセンターとか、手に持って帰れないものを買ったときです。ですから、何も困ることはありません」

「そうでしたか。いつも歩いて来られて大変だなあと感心していましたが……そういえば、一度車に乗って来られたことがありましたね。車を運転していた人が、その会社の人ですか？」

「いえ、あの人は違います」と男は言ったまま言葉を閉じた。青年も、あえてそれ以上たずねなかったが、何かまずいことを言ったのかなあ、と気になって、話を変えた。「確かにホームセンターから比べれば、僕の家などは散歩程度の距離でしょう」

すると男は、声を出さない変な笑い方をしたが、その薄気味の悪い笑顔を見て、柿ノ倉はまた自分の家の前の住人のことを思い出した。軒で首を吊った男のことだ。

で、柿ノ倉は言った。

「ところで、あなたがここに小屋を建てたのは、いつ頃のことかね？」

「もう五、六年は経つでしょうね」

前の住人が自殺したのが五年前だから、男は前の住人を知っているかもしれない。そう思って柿ノ倉は聞いた。

「じゃあ私があの家に住む前の住人を知っているかね？」

「よく知っていますよ。と言いますのも、わたくしがこの仕事をしだして、最初に訪問した家だからです。快く承諾してくれましたよ」

「若者だと不動産屋から聞いたが、どんな感じだったかね？」

「……ちょっと変わった感じで、あまりしゃべらない人でした。いつも何か考え事をしているように顔をしかめていましたね」

「自殺をしたというのは知っているかね？」

「知っているもなにもわたくしが第一発見者ですよ。巣箱の点検に来て、軒であの方が首を吊っておられたので、驚きましたよ」

「なぜ自殺したかは分からないよね？」

「悩み事があったのですが、わたくしには分かりません。とにかくあまりしゃべらない人でしたから。わたくしとしても養蜂家組合のメンバーを失って悲しみましたよ。最初の契約者でしたから、なおさらです。蜂の巣箱も持ち帰りました。いえ、あの方に家族がおられれば、継続できるのですが、独り身でしたから勝手に置くわけにはいかないのです。その辺はきっちりしています」

このとき青年は、ぶっと息を吐いた。蜂の巣箱を勝手に置けないと言いながら、自分の土地には勝手に小屋を建てているではないかと思ったのだ。

柿ノ倉は、ふと前の住人はひょっとするとこの男に見せるために、軒で首を吊ったのではないかと考えたが、それは不動産屋が家の中では発見されないと思ったからでしょう、と言った言葉を思い出したからだ。もちろん、根拠があるわけではない。

それにしても養蜂家組合は、なんと不思議な存在だろうか。表向きは、つまり行いはどう考えても善である。しかし、どこか腑に落ちないところが柿ノ倉にはあった。それはまず自分の家のすぐ近くに、しかもとんでもない場所に拠点があるということだ。が、それは今、男が説明をしたことによって、多少納得できた。納得できないのは、男が言った釣り船の合図である。まるで推理小説のようではないか。しかし、それもミステリー好きの柿ノ倉にとっては、決して嫌なことではない。むしろ楽しみが増えたと喜んでさえいた。——柿ノ倉は昼夜を問わず二階の窓から海を眺めている。今まで、ただ美しいだけの風景だったのが、今後それにミステリーの要素が加わったのだ。男の話が本当かどうか、期待しながら暮らせるではないか。そういえば、以前ライトをこちらに向けて点滅させたり、円を描くようにぐるぐる回したりしていた船があったことを柿ノ倉は思い出した。変だなあ、たぶん漁師が遊んでいるのだろうと、そのときは思ったが、男の話を聞いて、考えを改める必要が出てきた。あれが合図なら、いったい何を知らせていたのだろう。男が言った、船の居場所は、嘘に決まっている。きっと何か重要なことを知らせているのだ。その何かを柿ノ倉は研究してみようと心に決めた。

さて、柿ノ倉と青年は、養蜂家組合の男の話に一応満足した。もちろん理解できない部分があったことはあったが、男が終始低姿勢であったことで、これ以上追求するのも気の毒になり、別れを告げて、その場を去った。

そうして柿ノ倉の家の庭に戻った二人は、その理解できない部分を話し合った。

「しかし、あの人の話しは本当なんですかねえ？」と青年が言った。「釣り船から合図があるというのは——」

柿ノ倉はそれに答えた。

「前に一度、いや、あるいは二回ぐらい私はそういうのを見たように思う。——ライトをこの高台に向けて点滅させたり、ぐるぐる回したりするのをね。だから私は、今後そういう船を注意して観察してやろうと思っているのだよ。じつを言うと私は昔からこういう謎ものが好きでね。自分でもミステリーを書いているんだよ」

「へえーそうでしたか。で、もし何か分かれば僕に教えてください。ここは僕の椎茸山に近いので、そのついでに寄るかもしれませんから。——今日はもう遅いので椎茸の原木は見ないで帰るつもりです」

「ああ、いつでも来られたらいい。君はこの近辺に詳しいだろうから、私も君の話を聞いている参考にしたいいし」

「ええ、何でも聞いてください。僕としても話をする相手がこの山にいるというのは、とてもうれしいことです。もともと人としゃべるのが大好きなのですが、しかし残念なことに、今の時代農業をする青年が少なくて、僕の話し相手になってくれる人があまりいないのです。ブルーベリーの苗木をみなさんにお分けしているのも、じつは話し相手を求めて、というのも一つにはあるのです」

青年は、軽トラに乗り込むと、エンジンを掛けた。

なかなかの好青年だと柿ノ倉は思いながら、去っていく軽トラを見送った。

5

柿ノ倉は、すでに述べたように昼夜を問わず暇があれば、二階の窓から眼下の内海を見渡すのだが、確かに頻繁に見かける釣り船が一艘あった。双眼鏡で見れば、男が言ったよう甲板の真ん中に低い屋根があり、これは炎天下のときだけではなく、突然の雨が降ったときの避難場所にもなるのだろうが、他にそのような船はないから、この船に間違いないようであった。そしてそれは、以前ライトの明かりを点滅させた船と同じものであると柿ノ倉は確信した。

船の上には誰もいなかった。平日だから釣り客はいなかったのだろうが、では何のために海に出ているのだろうか。やはり何かのメッセージを山に向かって発するためなのだろうか。

やがて、船の後方にある操舵室から帽子をかぶりサングラスをした男が現れた。男は手に何か持っていた。それは大きめの懐中電灯で、それをこちらの方角に向けて点滅させたり、振り回したりしていた。養蜂家組合の男も、崖のところにおいて、それを見ているに違いない。その様子を想像して、柿ノ倉は今更ながら、あの合図は船の位置を知らせるためではないと確信した。なぜなら、船の位置など、崖の上から見れば一目瞭然だからだ。養蜂家組合の男は何か秘密を隠している。他人には教えることができない何かを。しかしそれは、真つ当なものではなく、犯罪に関するものではないだろうか、と考えるのは、柿ノ倉が推理小説を読んでいるせいなのだろうか。養蜂家組合という慈善事業のようなことをしている人が、その陰で犯罪に手を染めている、という考えを柿ノ倉は極力したくなかった。しかし、世の中はカモフラージュである。実力のない者が実力のあるフリをしたり、悪人が善人のフリをすることは世の習いである。ひょっとするとこの養蜂家組合というのも、世を忍ぶ仮の姿で、本来の目的は他にあるのではないだろうか。

6

言うまでもないが、柿ノ倉は独り身だから、毎日の食料は自分で買いに出かけなければならなかった。外で食べることは滅多にないが、海沿いの町のスーパーにはよく買いにいった。またこの町には図書館があり、ここも柿ノ倉のお気に入りの場所だったが、なんとこの図書館で、柿ノ倉はあの青年とばったり出くわしたのだ。あの青年とは、もちろんブルーベリーの彼だ。図書館の駐車場にどこかで見たような軽トラが置いてあるなと思っていたが、やはり彼の車だった。

青年は一階の趣味本のある書棚を真剣に眺めていた。柿ノ倉は近づいて、「やあ！」と声をかけた。すると、青年はギョツとしたように振り向いた。柿ノ倉の姿を認めると、「驚きましたよ、こんなところで人から声をかけられたことがないものですから」と言った。

「君もよくここに来るのかね？」と柿ノ倉は聞いた。

「たまにですが、今日は釣りの本を借りに来たのです」

「ほう、君は釣りをするのかね？」

「ええ。川釣りですが。しかし、せっかく近くに海があるのですから、海釣りもいいかなと思ひまして、食料にもなるし一石二鳥ですし」

「なるほど、それはいいね。私も定年退職をして、これから暇を持て余すことになるので、釣りでも趣味に持とうかなと考えたこともあるんだが……」

「じゃあ今度一緒に釣りに行きませんか——」

柿ノ倉は笑いながら、「いや釣竿もまだ持っていないし、それに釣竿は高いのだろう」

年金生活者になってから、柿ノ倉は以前にもまして儉約家になっていた。

「安いのもありますよ。なんなら僕のを貸してあげましょう。二、三本持っていますから。それより船賃の方がけっこうかかりますけどね」

「じゃあ何、釣り船に乗って釣りをする気かね」

「ええ——もちろん堤防から釣りをすることもできますが、しかし僕はこの前のことで、一度あの船に乗ってみようと思っているのです」

「あの船……」柿ノ倉は言った。「養蜂家組合の人が話していた釣り船のことかね」

「そうです。あれから僕は、ずっとそのことが気になっていまして——誰でもそうでしょう。自分とこの所有地で他人が何かコソコソやっていたら、何をしているのかと気になるものです。それと僕は磯釣りはあるのですが、船釣りはないので、一度やってみたいと思っていたのです。ちょうどいい機会だと思って」

柿ノ倉はうなずいた。百聞は一見にしかずと言うが、あの船に乗らずして、あの船のことを知ろうというのがどだい無理なことなのだ。

「船代は高いのかね？」やはり金額が気になる柿ノ倉であった。

「四、五千円はかかるようですが、時間を考えれば妥当だと思いますよ。途中で島に上がって休憩できるようです。また、以前乗ったことのある人から聞いた話では、お昼に飲み物とパンなどが出されるようです」

「ほう、それはなかなかサービスがいいね。じゃあぜひ一緒に行こうじゃないかね」

「ええ、平日が空いていますが、しかし平日は五名以上でないと船は出ないようですから、メンバーを増やすか、それとも土曜日曜の込んだ日を選ぶかです」

柿ノ倉は何曜日でも良かった。毎日が日曜日のようなものだから。

「君の都合のいい日でいいよ。で、釣竿は貸してくれるかね」

「お貸しします。では今度の日曜日ということにしましょう。わいわいやる方が面白いですから」

農業青年には珍しく社交性のある男だと、柿ノ倉は思いながら、「前日に、電話で何時頃その波止場に着けばいいのか教えてくれるかね」と言って携帯の電話番号を青年に教えた。

「当日は僕があなたの家までお迎えに行きますから、その時刻までに準備を整えていてください。他所から来られて間がないあなたに、あの波止場は分かりづらいでしょうから」

「それはかたじけない。助かるよ」

「それにパンが出るといっても、一つでしょうから、弁当もご自分でご用意しててくださいね」

「もちろんそうするよ。なんだかピクニックに行くようで、わくわくしてきたよ」

青年は微笑を浮かべた。

柿ノ倉は、二つの期待で胸が膨らんでいたが、それはいつも眺めている方向とは、真逆から自分の家を眺めることができるということと、船頭の合図が何を意味しているのか、分かるのではないかという期待からだった。

青年は一冊の本を書棚から抜き取ると、その本をペラペラとめくり（写真の一杯載った海釣りに関する本だった）「この本が良さそうだね」と言って、「じゃあ僕はこれで失礼します。——今度の土曜日にお電話しますから」と、貸出のカウンターの方へ歩いていった。

柿ノ倉は、思いがけず青年と会って話ができ、あの釣り船のことを研究する機会を得たことで、あの青年は、ひょっとすると自分にとってラッキーボーイかもしれない、と思った。なぜなら、ブルーベリーのことといい、あの養蜂家組合のことといい、さらに釣り船のことといい、彼がいなければ、このままずっと知らないままで終わったかもしれないからだ。

因みに、その棚にある釣りの本を、柿ノ倉は手に取ってめくってみたが、やはり自分には推理小説の方がいい。釣りは今度の釣り船だけにしておこうと思った。生き物を殺すことが好きではないうえに、けっこう面倒臭がり屋だからだ。

この後柿ノ倉は、文芸書の棚で、二、三冊本を抜くとそれを閲覧席で読んだ。柿ノ倉は、パチンコもギャンブルもしなかったが、ただ読書に関しては時間を惜しまなかった。読書に勝る娯楽はない、これが柿ノ倉の信条であり、自分でも小説を書いている。プロの作家が、どのような文書を書いているのか、それを研究するためにも本を読む必要があったのだ。

さて、この図書館の帰りに、どこかの店に寄って、惣菜を買うのが柿ノ倉のいつものコースだった。

この港町にはアーケードと露天の商店街があり、柿ノ倉はその両方を日替わりで、あてもなくぶらつくのが好きだったが、その日は露天の方を選んだ。すると偶然、某レストランから、養蜂家組合の男が、ひょっくり出てきたのにかち合わせた。男は、柿ノ倉に気づいてニコッと会釈したが、何も言わなかった。しかし、いつもの低い物腰である。柿ノ倉も、ニコッと会釈したが、声をかけることはしなかった。このレストランが、この前男が言っていたレストランなのだろう、改めて店の中を覗き込むと、なかなか洒落た店だった。男はここで食事をしたのだろうか、あるいは何かの用事で来たのだろうか、足早に遠ざかっていった。

7

日曜日の早朝、青年が約束の時間に、いつもの軽トラで迎えに来た。柿ノ倉は弁当や飲み物の入ったクーラーボックスをその荷台に載せ、手ぶらで助手席に乗り込んだ。

船着場に着くと、すでにたくさんの釣り客が集まっていた。間もなく釣り船と陸地に渡し板がかかり、釣竿とクーラーボックスを持った釣り人たちが一斉に乗船した。船の上で、一人ずつ確認をして、料金を払い名簿にサインするシステムだ。その後、船は離岸しゆっくりと沖に向かって進んだ。船頭はもと漁師で、この海域に熟知している。青年は、すでに人からそのことを聞いて知っていた。潮の流れによって魚は移動するから、その流れを読むことが船頭の腕の見せどころであるらしい。

一番目のポイントのところで、船はエンジンを止めた。柿ノ倉たちは、百円ショップで売っている小さな折りたたみ椅子に腰を下ろした。これは青年が二脚持ってきたのであり、他の釣り人の中にはクーラーボックスを椅子にしている人もいた。

釣り客は、全部で十数人ほどいたが、連れで来ている者もいれば、一人で来ている者もいた。それぞれ等間隔で釣り糸を垂れていた。船頭は、四十歳くらいのよく日焼けした男でサングラスをしていた。必要以外はあまりしゃべらなかったが、釣り客の方も、常連が多く勝手を知っているので、船頭にたずねることもなかった。もともと釣りというのは孤独を楽しむものだ。魚が掛かるのをじっと待つ、そこに愉悦を感じるのだが、柿ノ倉と青年は、しじゅうしゃべっていた。それは柿ノ倉が、釣りをするのが初めてであり、ちょっとしたことでも興が湧き、またたずねることも多かったからだ。当然、釣竿の扱いに難儀したが、餌は青年が針につけてくれた。

柿ノ倉は、釣りに夢中になっているようでいて、じつはたえず船頭の行動に注意していた。それがこの釣り船に乗った目的だから当然なのだが。

さて、船頭は後方の操舵室にいつもいたが、たまに外に出ては、あの高台の崖の方を見ていた。

柿ノ倉も、高台にある自分の家を眺めた。日頃二階の窓から見下ろしている海上から、逆に自分の家を眺めて、あれが自分の終の棲家になるのか、と感慨に耽った。華々しい人生ではなかった。地味で人に語るようなものは何もなかった。といて、後悔しているわけでない。自分に適した生き方をしてきたつもりだ。しかし、ここで一つ自分らしい花を最後に咲かせてみたい、と柿ノ倉は、数年前から思うようになっていた。二番目のポイントに移動した後、船頭が甲板の方へ出てきたとき、手に大きな懐中電灯を持っていた。いよいよ何かやるな、と柿ノ倉はそれとなく様子うかがった。青年は釣りに夢中で、気づいていないようだったが、柿ノ倉は黙っていた。船頭に自分たちの思惑を察知されてはいけないからだ。

船頭は、持っている懐中電灯のスイッチを入れた。この明るいときに明かりは必要ないのだろうが、しかし距離を考えれば、光らせた方が断然分かりやすい。山に向かって円を描くような合図をした。

柿ノ倉は、すぐに腕時計を見た。午前十一時だった。崖の上を見ると、やはりあの養蜂家組合の男が立っていた。そして、同じように懐中電灯で合図を送ってきた。

お昼になると釣り船は、とある無人島に横付けされて、柿ノ倉たちは上陸した。ここでしばらく休憩するのだが、弁当を食べた後は、昼寝をしてもいいし、釣りをしてもいい。ここも釣りポイントの一だからだ。

船頭は一人一人にアンパンやジャムパン、そしてペットボトルのお茶を配った。もちろん釣り客は、自らも弁当を持ってきているが、これはこの釣り船のサービスの一つだった。釣り船のオーナーは、例の養蜂家組合の篤志家でもある。社会に対して何かしら奉仕をしないでは気がすまないのだろう。余ったパンは釣り客に持ち帰らせた。

さて船頭も、島に上がって弁当を食べたので、このチャンスにと柿ノ倉はそばに近づいた。そして話しかけた。船頭はサングラスをした目で、おやっという感じで柿ノ倉を見た。右頬に傷があり、少し怖い人相であったことで、めったに話しかけられたことがなかったのだろう。しかし、柿ノ倉の質問に、ちゃんと答えてくれた。それで分かったのは、船頭は、釣り船のオーナーが経営している知的障害者の施設でいつもは働いていて、土曜日曜日、そして平日でも予約が入った日は、釣り船の船頭をしているということだった。柿ノ倉は、平日に釣り客も無しに船を出すことはあるのかと、聞いてみたかったが、それをすると船頭は怪しむだろうから、黙っていた。

「ところで」と柿ノ倉は言った。「この釣り船のオーナーは養蜂家組合というのをされているようだが……」

すると船頭は、再びおやっという感じで横にいる柿ノ倉を見た。

「ええ。よく知っていますね。多角経営というのか、手広く何でもやっていますよ。もっとも養蜂家組合は慈善事業のようなもので、儲けはとくに無いようですが。知的障害者の施設も、我が子のためにしているだけで、儲けなどは考えていないのです。私もその施設で長いこと働いていますが、まったく大した人物ですよ、社長は」

「じつは私も養蜂家組合のメンバーなんだがね」

と柿ノ倉が言うと、船頭は弁当を食べる手をとめて、柿ノ倉の顔をじっと見た。

「そうですか。それは良いことをされています。日本古来からいる日本蜜蜂を絶滅の危機から救出出すというのが、この組合の趣旨です。皆さんの協力で成り立っているのです」

ブルーベリーの青年が、いつの間にか柿ノ倉の横に来て、そして、柿ノ倉に「あの話をしてみませんか」と言った。

柿ノ倉は、すぐにピンときて、うなずいた。それは例の合図のことだ。養蜂家組合の男が自ら話したことなので、言っても差支えがないだろうと船頭に、「ところで、これはその養蜂家組合の人が話をしてくれたのだが、なんでもこの釣り船と崖の上の組合の人と何か合図を取り合っているそうじゃないかね？」

すると船頭は、今度は驚愕した。

「あの人がそう言いましたか。まいりましたな。これは秘密だったのですが……」

このとき青年が口を開いた。

「じつはあの山は僕とこの山でして、断りもなしに小屋を建てていたことから、自然とそういう話になったのです。なぜここに小屋を建てたのか。するとあの崖の上から、この海を見晴らすためだと言われたのです。なるほど、ここからでもあの崖がよく見えます。さらにその目的は、この釣り船と合図を取り交わすことだと言いました」

「最前、午前十一時頃だったが、あなたは懐中電灯を持ち、あの山に向かって何か合図をしたようだが……」と柿ノ倉は言った。

船頭はハハハと笑った。「まるで尋問みたいですね。ええ、確かに連絡を取り合っています。しかし、それ以上は何も言えません。あの人も言っていないのでしょ。だから私も言えません」柿ノ倉は、あえてそれ以上は聞かなかった。船頭の人柄が観察できただけでも大きな収穫があった。

時間が来て、釣り客は再び乗船した。後半の釣りポイントに向かって船は移動した。

そのポイントで船は停止して、しばらくして、船頭はやはり手に懐中電灯を持って甲板に出て来た。今度は青年も気づいて、それを見ていた。船頭は、柿ノ倉たちにちょっと視線を投げかけたが、ひるむことなく山に向かって合図を出した。柿ノ倉は腕時計を見た。午後三時だった。

崖の方を注目すると、養蜂家組合の男も、懐中電灯で円を描いたりしていた。かなり遠い距離だったが、ライトをつけているので、すぐに分かった。懐中電灯を小旗の代わりにするのなら、その振り方で、意味が違ってくるのではないだろうか、と柿ノ倉は考えた。たとえば、Zであったり四角であったり、あるいはバツテンや三角、縦、横といった具合に。今の時代携帯電話があるのだから、こんな原始的な方法で連絡を取り合う必要はないのだ。だからこれは単なる合図ではない。ひょっとすると誰かに見せるためにしているのではないだろうか、と柿ノ倉は考えたが、じつは以前からそう思っていたのだ。——だが、いったい誰に……。柿ノ倉はますます興味が湧いてきた。年金生活者の柿ノ倉にとって、今回の釣り船料金は決して安いものではなかったが、しかし、今後の楽しみを考えれば、むしろ安い料金だったと言えなくもない。小説の格好のネタになるではないか。人付き合いもなく、決まったところしかいかない柿ノ倉にとっては、書ける事柄は限られていた。今回の件は十分にミステリーの資格があるだろう。この素材をどう料理しようか、柿ノ倉はもう腕がむずむずしていた。

五時過ぎ、釣り船はもとの波止場に帰着した。釣果の方は、初心者の柿ノ倉が、名も知らない小魚を数匹釣っただけに対して、青年の方はベテランだけに、そこそこの釣果があるようだった。下船の際、船頭は一人一人に頭を下げたが、柿ノ倉と青年に対しては、それだけでなく、意味深な笑みを浮かべた。

8

軽トラを運転しながら、青年は言った。「どうも僕には解せませんね」

「解せないというのは、この私も同じだが、君の言う解せないというのは、やはりあの合図のことかね？」

「いえ、確かにそれもありますが、じつは僕はあの船頭さんを知っているのです。さっき思い出したのですが、あの人は一度、僕のイチゴハウスに来たことがあるのです。この前、養蜂家組合の人と話をしたときに、車に乗って来られたという話をしましたが、その運転手があの船頭さんだったように思います。あのときはサングラスをしていませんでしたから、すぐに気づきませんでした。顔の横にある傷で分かったのです。しかしそれも、養蜂家組合の人と合図を取り合っているという話を知らなければ、おそらくずっと気づかないままでいたでしょう」

「で、そのとき彼らは君のイチゴハウスに何をしに来たのかね？」

「もちろん蜜蜂の様子を見に来たのです。でもいつもは一人で来られるわけですから、実際のところはよく分かりません。こちらも尋ねる理由もありません。で僕は彼らの様子を見ていたのですが、あの養蜂家組合の人がハウスの隅で片手をぐるっとさせると、ハウス中にいた蜜蜂が一斉にあの人の方に集まってきました。すごいもんだなあ后感心していると、今度は船頭さんの方が巣箱を開けて、中の様子を確認していました。二人ともネットを被っていませんから、いつもの人が蜜蜂を自分の体に集めて、船頭さんの作業をし易くしたのでしょう。僕はハチミツを採取するのかと思いましたが、そうではありませんでした。聞いた話では、普通の養蜂業者は、遠心分離機を使ってハチミツを採取するようですが、ここはヘラでハチミツを瓶に入れます。しかし、このときは点検だけでした。イチゴハウスは三棟あるのですが、三棟とも同じようなことをして、帰っていきました」

「それはたぶん見習いだったかもしれんね」と柿ノ倉は言った。「養蜂家組合も一人だけでは何かあった場合に困るから、予備員として、教えていたのじゃないかな」

「なるほど、そうかもしれません。確かにまったく知らない人がすぐにすぐできる作業ではありませんし、第一どこに巣箱を設置しているか、実際に現場を回って確かめておく必要がありますから。それにしても、ちょっと変わった人たちですね。いえ、悪い意味ではありませんが、何となく不気味です。あんな林の中に小屋を建てて、しかも毎日のように合図をし合っているのですから」

柿ノ倉が言った。

「その合図を私はあれからずっと研究しているんだよ。ちょうど二階の窓から海全体を見渡すことができるからね。あっ、このことは前にも言ったかな」

「ええ。そのとき僕は確か、何か分かれば教えてほしいと言いました」

そんな話をしているうちに、軽トラは柿ノ倉の家に着した。柿ノ倉は自分が釣った魚も青年に持って帰らせることにした。自分で料理できないわけではないが、青年に何かプレゼントしたかったのだ。もっとも青年は、それほど喜びはしなかったが、柿ノ倉の好意を受け取った。青年が去った後、柿ノ倉は寒くはないが手をすりながら、ほくほくした気分で玄関に向かった。その日の夕飯は、いつものインスタント食品ですませた。そして柿ノ倉は、すぐに二階の書斎に上がった。暮れなずむ内海をぼんやり眺めるのが、柿ノ倉の至福のときであった。実際、これがなければ柿ノ倉がこの家に住む理由はなかった。

ところで家族のいない柿ノ倉は、ずっと一人で暮らしてきた。だから、一人でいることには慣れている。が、ふと家族があったらなあと思わないこともない。これまでの人生で二度、結婚というチャンスが目の前にあった。しかし、柿ノ倉はいずれも自分からそれを反古にした。工場勤務で周りから比較的うるさく言われなかったこともあるが、元来孤独が好きで一人暮らしが自分の性格に合っていると昔から自覚していた。子供が欲しいと思ったこともない。ただ、せっかくこの世に生まれて来たからには、自分しかできないことをしてやろう、自分の花を咲かせてやろう、と歳を経るにつれて考えるようになった。小説を書き始めたのもそのためだ。別にプロの作家になるつもりはない。しかし、自分の頭で考えて書いた文章を誰かに読んでもらいたい。大勢の人に読んでもらいたい。そこに自分の存在価値があると思ったのだ。

すっかり暗くなった海にライトが点滅した。柿ノ倉は思わず身を乗り出した。そのライトが円を描いたりしたことで、あの釣り船に間違いないと柿ノ倉は思った。昼間にやって、また夜間にも合図をするというのは、よっぽどのことだ。養蜂家組合の人も、まだあの崖にいるのだろうか。そのことを確かめてみたかった。しかし、一日中釣りをして心地よい疲労感があったので、とてもそれを実行する元気はなかった。別の日にチャンスはいくらでもあるだろうし。

9

柿ノ倉は、一日中家で過ごすことが多い。それでもほぼ毎日食料を買いに出かけた。それが気晴らしでもあった。海沿いの港町に、ちょっとしたデパートがあり、この食料品売り場でよく買い物をした。佃煮なんか売っていて、柿ノ倉はそれが好物であった。他にオカズがなくても、佃煮さえあればなんとかなった。漬物の代わりでもある。

さて、この古いデパートの屋上には、小さな観覧車があった。今は使われていないようだった。ちっぽけな観覧車なので、遠くを見渡すほどのこともないのだろう。柿ノ倉の二階の窓からの方が、よっぽど見晴らしがいい。しかし柿ノ倉は、この屋上にあるベンチで休憩するのが大のお気に入りだった。高い金網のフェンスがあり、そこから町並みや通りを行き交う人々を眺めるのが、楽しみだった。

このデパートのある商店街の通りはアーケードになっていて、歩行者は見えなかったが、アーケードはこのデパートのところで終わっていた。先にあるフェリー乗り場に向かう道は露天だった。その通りを歩いていたのが、例の養蜂家組合の男だった。よく歩く男だ。歩くのが仕事だと言っていたが、確かにそうなのだろう。しかし、どこへ向かっているのだろう、手に何も持たずに、とっていると、男は脇道にそれて、いったん家並みに姿を消した。しばらくするとまたずっと向こうの方で姿を現したが、何の躊躇もなく一軒の豪邸に入っていった。この豪邸は、この町の屈指の資産家の家だった。庭に松の大木があり、銘木図鑑にも載っているようだった。

この屋敷が、ひょっとするとあの養蜂家組合の篤志家の家かもしれない。だとすれば、男がその家をたずねたのは、しごく当然なことだ。何か用事があったのだろう。昔風のどっしりとした建物で、その裏にも現代的な建物があるようだった。養蜂家組合の男は屋敷の隅を通りその裏側の建物の方に姿を消した。柿ノ倉は、しばらくその屋敷を観察していたが、男が出てくる様子がないので、仕方なくデパートの屋上から退散して、駐車場の方に向かった。そして帰りがけに、その屋敷の前を通ろうと車に乗り込んだ。

アーケードは歩行者専用道だから、遠回りをして柿ノ倉は、あの屋敷の前の道をゆっくり走らせた。門のところで車を止めて、表札を見ると空穂坂とあった。ウツボザカと読むのだろうか。そういえば、養蜂家組合の男の名前を柿ノ倉は知らなかった。知らなくても別に困ることはないから聞くこともなかったし、また男の方も自分から名乗ることをしなかった。もしかするとこの屋敷はあの男のものかもしれない。仮に男の屋敷だとすれば、あの崖の小屋からここまで歩くには小一時間ほどかかる。が、健脚なら散歩程度だろう。それに地元の間人なら、近道を知っているはずだ。車で通れない細い路地を歩けば、もっと短縮するだろう。そういえばと柿ノ倉は思った。あの山の中で、散歩の途中まだ一度もあの男と出会ったことがないのだ。あれほど頻りに散歩をしながら、遭遇しないというのは、柿ノ倉が主に車が通れる広い道を歩くのに対して、男は細い獣道のようなところを歩いているからではないだろうか。あの高台には、細い道、雑草や熊笹に縁どられた道が、いたるところから発生している。柿ノ倉はあまりそういうところに入り込まなかったが、あの男は、そういう細かい道をくまなく知っていて、もっぱらそういう道を歩いているのだろう。なぜならあの男は、この界隈を歩くことに関してはプロだからだ。

と、後ろから車が来た。それで柿ノ倉は松の大木が偉容を誇るこの屋敷を後にして、自分のネグラに戻った。

10

例によって、柿ノ倉は二階の書斎から眼下に広がる町の明かりを眺めながら、この港町のことを詳しく知りたいと思った。昔は廓もあったほど栄えたところで、今は繊維産業が盛んだが、知っているのはその程度で、それ以上のことは知らなかった。たとえばこの町の権力者は誰なのか、そういうことを知りたかった。どこに何があるのかは地図を見れば分かることだ。それよりも興味があるのは人間の構図である。端的に言えば、空穂坂という変わった苗字は何者なのか、あれほど立派な屋敷を有しているのなら、この町の名家に違いないが、養蜂家組合の男とどうつながりがあるのか、そういったことを知りたかった。それによって、あるいはあの奇妙な組合の構造が分かるような気がした。実際、あの釣り船との交信は、どう考えてもまともなものではない。これだけ携帯電話が普及している中で、あえて懐中電灯で合図をし合うというのは、何か理由があると考えるのが妥当だろう。

やはりこの町のことを知るには、地元の図書館へ行って郷土の資料を調べるのが一番である。どの図書館にも、たいてい郷土の資料コーナーを設けている。とくにこの町は、古くから港町として栄えた歴史があるわけだから、それ相当の資料があるはずだ。

図書館へ行って調べよう。柿ノ倉は急にわくわくしてきた。これほどわくわくしたのは、久しぶりのことだった。

11

図書館の二階の片隅がこの地方の資料コーナーになっていた。窓際に長椅子が置いてあり、そこに座って柿ノ倉は、書棚の書籍を、手当たり次第に読むことにした。またこのコーナーには、この町の航空写真も展示されていた。例の空穂坂の家を見ると何やら番号が付されていて、その番号の説明を読むと、かつての網元・空穂坂邸、と書かれていた。また、かつての網元はもう一軒あって、それは空穂坂邸とは正反対のところに位置していた。詳しく言えば町の東の外れに空穂坂の屋敷があり、西の外れの方に、もう一つの網元の屋敷があったのだ。ここもかなりの豪邸で、やはり庭に松の大木があった。この両家の松は、遠くの海からでも確認できた。一つの目印となっていたのだろう。そして、この二本の松が、まるで競い合っているかのように天に向かって伸びていたことから、柿ノ倉はこの両家がこの町の権力者で、ライバル関係にあったのではないだろうか、と推測した。因みに、もう一軒のかつての網元は、稲山田邸と書かれていた。

後になって繊維産業が盛んとなったこの町も、それまでは漁業と海運業が主体であり、船乗りからは廓のある港町として、その名を知られていた。

柿ノ倉は興味を増した。空穂坂、そして稲山田の名前が出てくる資料を片っ端から集めた。そうして分かったのは、柿ノ倉が先ほど推測したとおり、この両家はライバル関係にあり、昔から事あるごとに争い、些細なことで揉め事を起こしていたことだ。この町は両家を対極として、二分され町の人間はたいていどちらかに属していた。確かに内海という限られた漁場で、漁を生業とするならば、自然とそこに競争が生まれ、小さなことでも比較せざるを得ないのだろう。しかし、それは昔のことであり、今は世代も変わり、業種も違っているはずだ。かつての網元と記されているのが、その証拠である。

書棚を調べるうちに、柿ノ倉は、一冊の面白い本を見つけた。それは稲山田家の御子息（次男坊）が書いたエッセーだった。二十代の若者らしいが、稲山田家の成り立ちから、自分の今いる立場、日常の細々としたことが書かれていた。また同じ網元であった空穂坂家とはライバル関係にあり、それは今も続いているとしたうえで、面白いことに自分は空穂坂の娘に恋をして、恋愛関係にまで発展したと赤裸々に綴っていた。二人は学校の同級生だったようだ。誰が読んでもいいエッセーだから、あまり詳しいことは書いていなかったが、将来結婚を誓っていたようだった。ところが、ライバル関係にある両家の親が猛反対をして、二人は駆け落ち寸前にまでいった。結局、空穂坂の娘が飛び降り自殺をして、叶わぬ夢となったが、それ以降、自分は空穂坂家から恨まれ、また稲山田の家にも居づらくなり、裏山の高台にある稲山田の別宅で、一人世捨て人のように暮らしているという。このエッセーはその別宅で書いたらしく、自費出版をして町の図書館に寄贈したのだ。本に寄贈とハンコが押されていた。が、わざわざ自分の恥部を曝け出してまで図書館に寄贈したのには、何かわけがあったに違いないと、柿ノ倉は思った。そこで柿ノ倉は、再び推理を働かせた。———この本には、稲山田の成り立ちや、かつての網元の暮らしが紹介されていた。それは網元の子孫として、何も問題はない。問題なのは空穂坂の娘と色恋沙汰である。とくに娘の自殺は、醜聞以外の何ものでもないだろう。そしてそのことは、この町の人にとっては周知の事実だったに違いない。懺悔の気持ちがあったのかもしれない。後悔して、今は、修行僧のように一人で暮らしていますよ、ということを経世間に知らせたかったのかもしれない。しかし、と柿ノ倉は考えた。空穂坂の娘は、ひょっとすると自殺ではなかったのではないだろうか。もちろん、根拠があるわけではない。それと、さっきから気になっていたのだが、稲山田家の裏山の高台というのは、つまり柿ノ倉の住む高台のことある。航空写真でそれと分かったのだが、では別宅というのはどこにあるのだろうか、柿ノ倉の住んでいる家以外は、まったく見当たらないのだ。そういえば、前に住んでいた人間が、やはり独身の若者だったが、もしかするとその若者が稲山田の息子だったのだろうか。世捨て人のように暮らしていたというのが、何となく当てはまるような感じがした。であれば、養蜂家組合の男が何か知っているかもしれない。あの男は、最初にこの家を訪れ蜜蜂の巣箱を置いていったのだ。その際、契約書にサインするわけだし、あの男が空穂坂の人間なら、知らないはずがない。もっとも単なる使用人であれば、知らないかもしれないが、あの釣り船との奇妙な交信は、どうも稲山田と何か関係がありそうな気が柿ノ倉はして仕方なかった。因みに、稲山田邸は、あの崖の斜め下にあるのだ。

改めて柿ノ倉は、このエッセーの書籍を点検してみた。つまり何年に制作されたものか、また印刷所はどこなのか。するとそれは五年ほど前に地元の印刷所で作られたものだった。最近では自分史というものが、ちょっとしたブームになっていて、また詩や小説を書く人も昔から一定数いる。そういう人たちは、自分の本を持つのが夢であり目標でもある。しかし、その夢を叶えるとしたら、まず都会にある著名な出版社だろう。少々高くついても、その方が知り合いに配るときに自慢になる。稲山田のような分限者が、金額に拘る必要はない。もっとも、息子がどれだけ余裕があったか知らないが、それでも、あえて地元の小さな印刷所に依頼したところをみると、どうも地元の人間に読ませるのが目的ではなかったのか、と思えてくる。実際、素人が書いたエッセーを図書館に寄贈するというのも、普通はありえない。図書館側で拒否する場合もあるだろう。いちいち市民の著作を展示していたら、書棚がいくらあっても足りなくなるからだ。ただ稲山田の場合は、この町の名家であり、網元の歴史及び暮らしぶりを事細かに書いていたことで、図書館側は地元の資料として、そのコーナーに展示したのであろう。しかし、いったい何を地元の人間に読ませる必要があったのか。網元の歴史などは、おそらく地元の小中学校で教えているはずである。この町の住人の大半が、空穂坂と稲山田のどちらかに属しているというのならば、一番知りたいのは空穂坂家の娘のことだ。自殺の真相である。だが、世間が自殺と認めていれば、あえてその真相を明かす必要もなく、反対に世間の多くが自殺ではなく他殺だと考えていれば、それを否定しなければならなくなる。そのためにエッセーを書き、図書館に寄贈したのではないだろうか。柿ノ倉は、一度そのことを地元の人間に聞いてみる必要があると思った。ただ柿ノ倉は、地元知り合いを持たなかった。あのブルーベリーの青年は、海沿いではなく柿ノ倉のいる山を越えた裏側の人間であるから、おそらく海沿いのことはあまり詳しくはないだろう。また、例の養蜂家組合の男にたずねるのも、どうかと思った。なぜなら、どうもあの男は、稲山田と何か関係があるようで、聞けば、なぜ地元の者しか知らないことを知っているのかと、不審に思われるのがオチだからだ。しかし、それとなくほのめかすのなら、あの男は何か手掛かりになるようなことを、口に漏らすかもしれない。たとえば、この前のことだ。男が空穂坂邸へ入っていくのを見かけたと言え、どのような反応を示すだろうか。柿ノ倉は、そのことを試してみようと思った。

家に戻った柿ノ倉は、散歩がてら早速あの養蜂家組合の青いテント小屋へと向かった。こちらから出掛けなければ、男がいつ我が家に来るか分からないのだ。しかし、残念ながら男はいなかった。確かに男がいつもそこにいるわけではないから、これは仕方なかった。で柿ノ倉は、いったん家に戻った。

何度目かの散歩で、ようやく柿ノ倉は養蜂家組合の男を見つけた。崖の方に向かって男は背中を見せて歩いていた。後ろにいる柿ノ倉には、まったく気づいていないようだった。手に何か持っていた。それは懐中電灯ではなく、双眼鏡であることが分かった。男は崖に着くと、その双眼鏡で下界を眺め始めたが、その方向は海ではなく、町中であった。あの稲山田の屋敷がある方角だったが、このことから柿ノ倉は、養蜂家組合の男はやはり稲山田と何か関係があるに違いないと確信した。やがて男は、今度は上着のポケットから懐中電灯を取り出して、海に向かって合図を出した。海にはあの釣り船が待機していて、やはり同じように合図を送ってきた。

交信が終わった頃、柿ノ倉は男に近づいた。男は驚いて振り返ったが、その驚き加減が尋常ではなかった。まるで犯罪行為を見られたかのように、しまったという感じで、口を開けて柿ノ倉を見たのだ。

「やあ、あなたでしたか。驚きましたよ」とやがて男は言った。

「私も驚いたよ。あなたが双眼鏡で、まるで探偵のようなことをしていたので——」

すると男は笑って、「探偵ですか。確かにそう思われても仕方ありません。しかし、こんな見晴らしのいいところですから、双眼鏡で眼下を眺めるのは不思議ではないでしょう。よく展望台には有料の望遠鏡があったりしますし。それと同じですよ」

「それにしても、ある屋敷をじっと眺めていたようだが……」

「はははっ」と男は笑ったが、返答はなかった。

「稲山田邸を見ていたようだが……」

と言うと男は、とたんに怯えたような顔をした。

「ど、どうしてその名前をご存知なんですか？」

そこで柿ノ倉は言った。

「じつはこの前、私はあなたが空穂坂という表札のある屋敷に入っていくのを偶然見かけてね。珍しい名前だし、立派な屋敷だったので、これはこの町の名家に違いないと、地元の図書館で調べたのだよ。いや別に悪気があってしたことではない。私は読書が好きで図書館にはよく出掛けるのだが、そのついでに郷土の資料コーナーで、その名前を探したのだ。

するとそのコーナーには、航空写真が展示してあって、あなたが入られた豪邸には、かつての網元・空穂坂邸と記されていた。網元はもう一軒あって、それが稲山田邸だったのだ。同じように大きな松の木があり、しかも空穂坂邸と同じくらいの豪邸で、これはきっとライバル関係にあると私は直感した。さらに調べると、その書棚に、同じ網元の稲山田家の青年が書いたエッセーがあった。読んでみると、これがなんと空穂坂家の娘さんのことが書いてあった。その娘さんは、このエッセーを書いた青年と恋仲にあり将来は結婚を誓っていたようだが、お互いの親から猛反対され、それで悲観して飛び降り自殺をしたと書いてあった。どこで飛び降りたかは書いていなかったがね……」

「この崖ですよ」と男は、吐き捨てるように言った。「ななみは殺されたのです。この崖から突き飛ばされたのです。奴が書いたエッセーはでたらめです。ななみは騙されたのです。奴はななみと結婚する気などなかったのです。それなのにななみと付き合い、そのあげく妊娠をして、困ったあげくに奴はこの崖からななみを突き落としたのです。夕闇の中で……」男は怒りにぶるぶる震えていた。

「よく知っているようだが、あなたとそのななみさんとは、どういう関係なのかね」

「妹ですよ。この近在の者は、誰もななみが自殺したとは思っていませんよ。実際奴がななみを突き落とすのを見た者もいるのです。しかし、それを公表することができず、こっそりわたくしの家に知らせてくれたのです。というのも稲山田はこの町の権力者ですから、報復を怖れたのでしょう。今でも町の役員をしています。先代から不動産業をやっていて、おそらくわたくしの家よりも羽振りはいいかもしれません」

「羽振りがいいと言え、空穂坂邸も立派で、あなたがあそこの人間だとすれば、じゃああなたが養蜂家組合の発起人かね？」

「いえ、違います。発起人はわたくしの兄です。しかし、もうこれ以上は、何も話せません。あなたがすでに稲山田のことを知っていて、ななみのことを話したので、わたくしもつい余計なことをしゃべってしまいました——これはわたくしたちの問題ですから……」

そう言うと、男は柿ノ倉の脇をすり抜けて、テント小屋の方に帰っていった。柿ノ倉はしばらくその崖にいて、稲山田邸を見下ろした。豪農のような立派な建物のその敷地内に、やはり空穂坂と同じように現代的な住宅が建っていたが、その壁に〇〇不動産と看板が掲げられていたのを見て、柿ノ倉はあれっと思った。柿ノ倉が高台の家を購入した不動産屋の名前だったからだ。と、その建物から一人のサングラスをした中年の男が現れた。恰幅のいい体格でスーツを着ていたこの男は、車庫に停めてある外車に乗り込むと、どこかへ出掛けていった。

柿ノ倉は、このとき想像を働かせた。養蜂家組合の男、いや、もう空穂坂と言おう。空穂坂はいったい何を双眼鏡で見ていたのだろうか。もちろん稲山田邸だが、稲山田の何を。——ここでおさらいをすると、稲山田と空穂坂は昔からライバル関係にある。それに加えてななみ事件がある。その事件があってすぐに、稲山田の次男坊は、一人この高台の別宅で暮らすことになるが、その別宅とは、とどのつまり柿ノ倉が今住んでいる家である。先ほどの看板を見て柿ノ倉はそう確信したのだが、そうなる家と家の軒で首を吊ったのは稲山田の次男坊ということになり、五年前のことだ。そのちょっと前に空穂坂の息子が、この崖の近くにテント小屋を作り、養蜂家組合なる珍妙な慈善事業を始めた。稲山田の次男坊と空穂坂の次男坊は、以前から知り合いだったのではないだろうか。家がライバル関係にあれば、お互いの情報はよく知っているものだ。だとすれば、養蜂家組合の男が、つまり空穂坂の息子があの家に来たとき、稲山田の息子は、まず警戒心を持って疑ったはずだ。空穂坂の妹ななみをこの崖から突き落としたというのが本当なら、正常な心理状態ではなかっただろう。それに日本蜜蜂の巣箱を置いたというのも疑わしい。稲山田の息子は、何か脅迫されていたのではないだろうか。ひょっとすると自殺したというのも、あるいは自殺に見せかけた殺人ではないのか。柿ノ倉はそんなことを考えながら、その崖を後にした。

13

夕食後、柿ノ倉は日課のごとく二階の書斎から海を眺めていた。そのとき、ふとこの家を紹介した不動産屋のことが頭に浮かんだ。稲山田邸の壁に看板があった不動産屋のことだ。あちこちに支店があるようだが、この家を売りに出した理由を考えたのだ。というのは、この家が稲山田の別宅であれば、なぜ他人に売る必要があったのか。確かにあの嫌な事件から解消されたい、という気持ちは分かる。空穂坂の娘との一件は、稲山田家の汚点であり、しかもこの別宅は、次男坊が自殺した忌まわしい現場なのだ。家を売却することで、あの忌まわしい事件を忘却させたかったのかもしれない。が、だとすれば、なぜこの家を解体しなかったのか。この家を消滅させた方が、よりさっぱりするはずなのだ。他人に売ったところで、あの事件が消滅するわけではない。となると、解体できない理由が他にあったと考えるしかない。この家を消滅させては困るもの、何か重大なものが隠されていて、それで家を壊すことができなかった、と考える方が、柿ノ倉にはより自然に思えた。

またこの家は、稲山田の息子と空穂坂の娘との密会の場所であった可能性がある。別荘風の建物は、若い二人にとっては、格好の逢引場所だったはずだ。しかし、重要なものが隠されているならば、他人に売ることはないはずであり、他人に売ったということは、それをカモフラージュするためではなかったのか。つまり自分が持っているのは危険だから、他人に持たせる、という理屈だとすれば、格安で人に売ったのも理解できる。もちろん自殺現場という事故物件だから安いというのもあるだろうが。

柿ノ倉は、一度徹底的にこの家を調査してみなければならないと思った。しかし考えてみれば、購入するときに柿ノ倉は家全体をくまなく点検したのだ。それこそ押し入れまで。そして、目に見えるところは何も問題はないと判断したからこそ購入したのだ。であれば、問題は目に見えない部分である。たとえば床下だ。当然のことながら何があるのか分からない。そこまで懸念して家を購入する者はいないだろう。実際、調べるには家を壊さなければできないわけだから。そしてこのとき、柿ノ倉は、稲山田が家を壊さなかった理由が、やはりそこにあるような気がした。別に根拠があるわけではないが、人に知られてはまずいものが床下に埋めてあり、そのため家を壊すわけにはいかなかったのではないだろうか。また、他人に売った理由も先ほど言ったように、稲山田の人間は、空穂坂に命を狙われる危険性を感じて、ここに住めないと判断したからではないだろうか。実際、この家に住んでいた稲山田の次男坊が死んでいるのだ。しかし、このまま空き家にしていたら、いつなるとき空穂坂の人間が、家の中を勝手に調査するかわからない。それを稲山田は、危惧したのではないだろうか。

——そこまで考えたとき柿ノ倉は、そういえばキッチンの床が比較的新しくリフォームされていることに気がついた。この家は築三十年を超えているのだが、キッチンの床は、まだ十年も経っていないような感じがした。ひょっとするとそこで稲山田の息子が自殺したのではないか、あるいは殺されたのではないかと柿ノ倉は考えたが、不動産屋の話でも空穂坂の話でも、軒で首を吊っていたということなので、それはないのだろう。

いずれにしても、柿ノ倉は、改めて空穂坂家の歴史を調べる必要を感じた。というのは、過去にななみ事件以外にも、空穂坂と稲山田との間で何か重大な事件があったのではないかと、でなければ、これほど執拗に稲山田家をマークしている理由が思いつかないからだ。柿ノ倉はまた図書館へ行って調べようと思ったが、しかし、そんなうまい具合に資料が見つかるかどうか、はなはだ心もとなかった。

星明りに照らされた海を眺めながら柿ノ倉は、今、自分が住んでいる家が、空穂坂にとっては解決すべき重要なキーポイントになっているような気がした。と同時に、図書館で調べるのもいいが、実際にこの町の人から直接話を聞く方が、より詳しいことが分かるのではないかと考えた。

もちろん、柿ノ倉は探偵ではない。だから詳しい調査はできない。が、簡単な聞き込み程度ならできるだろう。そこら辺の店で、たとえば飲食店で、空穂坂家のことを聞いてみるのだ。ただ真っ正直に聞いたのでは相手は不審に思うだろう。松の大木があるのだから、それを話のきっかけにすればいい。そういうものは、地元の人間にとって自慢の一つになっていることが多いものだ。居酒屋ならば、その店の主人が地元のことを詳しく知っているはずだし、たずねやすい。客と会話するのが居酒屋だからだ。

柿ノ倉は、酒は嗜まないが、焼き鳥などは好物である。そこで一度地元の赤提灯の店に入ってみようと決心した。あまり混まない店で、しかも夜遅くまでやっている店。柿ノ倉はそういう店はないか、昼間、車で探した。すると港の近くの公園脇に一軒ぽつんと居酒屋があった。周りが静かで、車を停める場所もそばにあった。柿ノ倉は、ここに夜来ることを決めて、家に戻った。

夜。遅い時間帯に柿ノ倉は再びそこを訪れた。店に入ると客は二人いた。若い男女のカップルで、カウンターの隅の席で、二人だけの世界に入り込んでいるようだった。店の主人は頭を短く刈り込んだ、四十歳くらいの人だった。いらっしゃいませではなく、しゃい、と言って、すぐに顔をそむけた。地元民は、たいていそんな感じだった。もともと漁師町だから粗野で気性が荒い人が多いのだ。とって冷淡ではなく、道を聞けば分かるまで教えてくれた。

柿ノ倉は、カウンターの席に腰を下ろした。もっとも、カウンターの席しかない狭い店なのだが、主人が一人で切り盛りをしていた。客でござった返すのは、かえって迷惑だと考えているのか、愛想はあまり良くない。おしぼりも黙って置いた。しかし、柿ノ倉は能弁な人間が苦手であるので、むしろこの方が良かった。それにこういう無愛想な人間の方が、一度ツボにハマれば調子に乗って余計なことまで、ペラペラしゃべることがあるものだ。

柿ノ倉は焼き鳥を数種注文した。

店の主人は、黙ってトリを焼いている。こちらから話しかけなければ、一切何もしゃべらないようだった。

酒が飲めない柿ノ倉は、ジュースを飲みながら、焼き鳥が焼けるのを待った。そして頃合を見計らって、例の空穂坂家のことをたずねた。

「ところで大将、この町には大きな松の木があるね。あんな大きな松の木は初めて見たよ。しかも二箇所あったが、あの家は庄屋か何かかね？」

「庄屋!？」店の主人は、少し笑いながら、「ここは港町ですから、庄屋はありませんよ。二箇所といえば、空穂坂と稲山田の二軒ということなんでしょうが、あの二軒はどちらも昔は網元でした」

「網元」と柿ノ倉は、初めて知ったように言った。「この町には網元が二軒もあるのかね？」

「ええ、この町の二大権力者です。町の東西に分かれて、今なお競い合っていますよ」

「競い合うって何をかね？」柿ノ倉は内心、これはいきなり亭主のツボにはまったかな、と思いつながらたずねた。

「ですから、決まっているじゃないですか。勢力ですよ。稲山田が不動産業を始めると今度は空穂坂が貿易業を始め、さらにあちこちにレストランをやっています。稲山田はこの辺り一帯の地主でもあるので、空穂坂としては気が気ではないんです。というのも、一気に陣地を拡大される恐れがあるからです。お客さんはどこの人か知りませんが、この町の後ろに大きな高台がありまして、あの山の半分を稲山田は持っています。近いうちに大々的に宅地開発をする予定があると聞いています」

「その高台に私は住んでいるよ」と柿ノ倉は言った。

とたんに主人は驚きの表情をした。

「あの高台に住んでいるのですかい、しかし、あそこまだ家があまり建っていないはずですが……」

「何十年と経った洋風の家が売りに出されていて、それを買ったのだ」

と柿ノ倉が言うと、主人は口を開けて、呆れたように柿ノ倉を見た。

「あの家を買われたのですか、あの家こそ……いえ、こういうことを今住んでいる人に言うのは忍びないですが、じつは呪われた家です、お客さんも気をつけた方がいいですよ」

「気をつけるって何をだね？」

「ですから命ですよ」

「命！？」

「ええ、あの家に前に住んだ人は、変な死に方をしています」

「知っているよ、自殺をしたのだろう」

主人はさらに驚いたような顔をして、「お客さんはそのことを知っていながら、あの家を買われたわけですかい？」

「格安で見晴らしも良かったからね。で、自殺した人は稲山田の息子さんだそうだね？」と柿ノ倉は、かまをかけた。

「そこまで知っているのなら、詳しく教えてあげましょう。そのとおり稲山田の次男坊です。しかし、あれは自殺ではないとこの辺ではもっぱらの噂です。自殺する理由がないのです」

柿ノ倉は、この調子なら事の真相を知ることができるかもしれないと期待を込めてこう言った。

「私はある人から聞いたのだが、稲山田の息子さんと空穂坂の娘さんが恋仲となって、結婚する気でいたのだが、双方の親から反対され、そのあげく娘さんがあの山の崖から飛び降り自殺をした。それで息子さんは精神状態がおかしくなり後追い自殺をしたのではないかと」

すると主人は笑いながら「よくできた話ですが、真っ赤な嘘です。どちらも自殺ではありません。そのことはこの町の人なら誰でも知っています。というか感づいています」

「自殺ではないと言うのなら、じゃあ他殺かね？」

「そうなりますね。もちろん誰が犯人かは、ここではお話しできませんが……」と言って、亭主は隅のカップルに目をやった。

他に客もいる居酒屋で、これ以上深く質問できないし、また主人もしゃべれるわけがなかった。それで柿ノ倉は、話題を変えることにした。

「ところで、養蜂家組合というのを大将は知っているかね？」

「養蜂家組合——知っていますよ。日本蜜蜂を守護するという団体でしょう。団体と言っては語弊がありますがね。じつは、あれは空穂坂家が稲山田家を見張るために始めたことです」

柿ノ倉は、思わず背筋を伸ばした。

どうやらこの質問も、店の主人のツボにハマったらしい。詳しいことが聞けそうだった。

で柿ノ倉は、平常心を装って言った。「しかし、養蜂家組合は実際に日本蜜蜂の巣箱をあちこちに設置しているようだが……」

「それは誤魔化しですよ。さっきも言いましたが、稲山田はこの辺の大地主ですから、それに対抗しているのでしょう。蜂の巣箱を置けば、そこが自分の領土だと考えているんじゃないでしょうか。しかし、本当の目的は他にあります。その一つが脅しなんです」

そう言って主人は、店の隅に座っている二人連れを再びちらっと見たが、若い男女のカップルは、自分たちだけの会話を楽しんでいるようだった。

「脅し？」と柿ノ倉は、聞き返した。

「ええ。お客さんは高台に住んでいるから分からないかもしれませんが、こっちの下界からはあの山の崖がよく見えます。あそこから空穂坂の人が、しょっちゅう稲山田の家を双眼鏡で眺めていますよ。また懐中電灯で合図を出したりしています。どこに合図を出しているかは言えませんが」

「釣り船……」と柿ノ倉は思わず声が出た。すると主人は、またしても驚いて柿ノ倉を見た。「お客さんは、何でもよく知っていますね。このことはこの町の者でも、そう多くは知っていません。私は飲み屋をやっているから、いろんな情報が入ってきますが、確かにあの合図はある釣り船に向かって発しています。しかしそれも、稲山田家の人間を脅すためにしていることです」

このとき隅にいた例のカップルが席を立ち、主人に勘定を催促した。二人連れが店を出た後、主人は身を乗り出すようにして言った。

「ではお客さんは、いったいどこで、そのことを知ったのですかい？」

「どこでっ、て言われても、じつは自分の部屋から海が見えるので、しょっちゅう海を眺めていたのだが、すると妙な釣り船が一艘あることに気づいた。いや釣り船自体は妙ではないが、船にいる人が妙なことをしていたのだ。それは懐中電灯の明かりで、こちらの山の方を照らして円を描いたりしていた。ついでに言うと私はその船に乗って釣りをしたことがあるんだよ、ちょっと前だが」

主人は笑って、「頬に傷のある日焼けした男がいたでしょう」

「ええ、船頭さんだよ、その頬に傷のある人は」

「私の同級生です。この店にもよく飲みに来ます。それで私は彼からいろいろと話を聞くことができました」

「その船頭さんはもと漁師だと言うじゃないかね」

「そうです。代々漁師をしていました。空穂坂の網元に属していました。この変では昔から空穂坂と稲山田のどちらかに属さなければ、漁ができない仕組みになっていまして。いや勝手に自分の船で釣りをしてもいいのですが、その魚を売りさばくことが困難なのです。ルートがないですから。しかし、時代も変わり網元という制度も廃れ、網元の両家は商売替えをせざるを得なくなったのです。が、それでもライバル関係は今も続いています」

「それでお互いの情勢を監視し合っているというのだね」

「いえ監視しているのはもっぱら空穂坂の人間です。たとえば言えば、加害者と被害者のようなもので、加害者が被害者のことを思うことはありませんが、被害者は加害者のことを常に恨んでいるでしょう。それと同じです」

「じゃあ何かね。空穂坂は稲山田から何かひどいことをされたわけかね？」

「お客さんが先ほど言われた、空穂坂の娘があ山の崖から飛び降り自殺をしたというのがありますが、実際は稲山田の次男坊が突き落としたのです。このことは他のところにおいて言わないでくださいよ。もっともこの辺の人たちはみんなそのことを知っていますがね。あなたがあの高台のあの家に住んでいるというので、特別にお話をしているだけです」

「しかし、だからといって四六時中稲山田家を見張る必要はないんじゃないかね」

「そう思うでしょう普通は。——稲山田の人間も次男坊が別邸で自殺したというのを信じていません。確かに軒で首を吊っていたようですが、それを発見したのは空穂坂の息子です。空穂坂の次男坊が養蜂家組合を名乗り、あ家の庭に蜂の巣箱を置いたというのは、稲山田の人間にとっては胡散臭い気味の悪いことです。また、毎日のようにあ崖の上からへんてこりんな合図をしているのを知っていますから、精神的にまいってきているのです。それが空穂坂の狙いでもあるのですが。しかし空穂坂が稲山田に恨みを持つのは、娘のことだけではないのです。それ以前にも空穂坂の人間は、稲山田の人間に殺られています。正確に言うと空穂坂に属する人間ですが、また殺られたかどうかはまだ分かっていません。——こうなったらすべてお話ししましょう。あの釣り船の船頭つまり私の同級生ですが、その妹がやはり稲山田の長男と交際していたのです。稲山田家というのはどうも放埒な血筋なようで、昔からよく女性関係でトラブルを起こしていますが、この長男もご多分に漏れず女癖が悪くいろんな女に手を出しています。しかもすぐに飽きるらしくて、捨てられた女性は一人や二人ではありません。船頭の妹も、その中の一人です」

「捨てられた、というまさかあの崖から投げ落とされたのではないだろうね？」

「いえ、行方不明になったのです。十年近く前ですが、あの高台で……たまたま高台を散歩していた人が、偶然船頭の妹に似た女性を見かけたのです。こんな山の中に若い女性に来ることは希ですから、よく覚えていたようです。搜索願が出されたとき、女性は稲山田の長男と一緒にいたとその目撃者は証言したのですが、もちろん長男はそれを否定しています。というか一緒にいたことはいたが、すぐに別れたと警察に言ったようです。あの別邸へ入ったという目撃はないですから、警察もそれ以上深く追求はできなかつたようです。——以降、その妹の兄である船頭が、やっきとなって探していたのですが、それから数年経って、今度はさっき言った空穂坂の娘の事件があったのです。そこで彼は空穂坂に協力を求めました。同じ稲山田に恨みを持つということで、頼みやすかつたのでしょう。じつは空穂坂の長男は、子供の頃よく私たちと一緒に遊んだ仲間でした。昆虫が好きで、蝉取りなどをして遊んだものです。そこで恨みもありライバルでもある稲山田を懲らしめてやろうと、あの養蜂家組合というのを思いついたのです。表向きは、日本蜜蜂の守護及び繁殖ですが、まあ確かに彼は日本蜜蜂の将来に懸念を持っていたことは持っていました。しかし本当の目的は、それにかこつけての船頭の妹の搜索であり、また稲山田に対する脅迫なのです。しかし長男は何かと忙しい人なので、弟にその任務を委ねたのです。次男坊は、崖から突き落とされた妹を大変可愛がっていましたから、進んで協力してくれました。彼自身稲山田の人間に復讐をしたいという思いが強かつたのでしょう」

そう言って主人は、薄ら笑いをしたが、その意味深な笑みは、ひよっとすると復讐はすでに終わっているという意味だつたのだろうか。なるほど空穂坂の娘が自殺ではなく他殺であれば、犯人は稲山田の次男坊しかいない。目撃証言もある。目撃証言というのはあまり信用できないものだが、仮に自殺であつたとしてもその原因は稲山田の息子にある。ライバル関係にあることを知りながら、妹に接近し誘惑した。それがなければ妹は死ぬことはなかつたのだ。その恨みを晴らすために空穂坂の次男坊は稲山田の息子を殺害したのだろうか。であれば、ななみの方は一応それで決着がついた。が、船頭の妹は、まだ手がかりさえつかめていない状態だ。そして、その妹の行方を知っているのは、稲山田の長男しか考えられない。空穂坂としては、何とかして長男に、白状させる必要がある。そのために稲山田を四六時中監視して、ぼろが出るのを待っているのではないだろうか。

柿ノ倉は言った。

「で、稲山田の長男は、そのことを知っているのかね」

「知ってる知ってる。だからいつもびくびくして暮らしていますよ。いつか自分も弟のように殺られるのではないかとね。間違つてもあの高台の家では暮らせない。なぜなら、周りに家がないので、何かあつたときに助けを求めることができないから。たぶんあの家を売りに出した理由も、そういったことが関係すると私は思つとります。実際、一度他人に売ってしまえば、空穂坂の人間も、そう簡単には、その敷地に入ることができませんからね」

「いや、養蜂家組合の人間が、この前入ってきたがね」

と柿ノ倉は言った。

「おやそうでしたか。知りませんでした。で、蜂の巣箱は置きましたか？」

「置いたよ。庭の隅に——」

「そうですか。だとお客さん、非常に危険な兆候ですぜ」

「えっ！」柿ノ倉は驚いて、聞き返した。「危険というと、どう危険なのだい？」

「ですから、空穂坂の次男坊は、船頭の妹の行方を探しているのです。お客さんが今住んでいる家が、最も怪しいと睨んでいるのです。あの家は、無人であってほしいのです。なぜなら、いつかあの家を手に入れて、屋根裏から床下まで探すつもりだからです。もしもお客さんが稲山田と何か関係がある人間だとすれば、空穂坂は間違いなく強硬手段に出るでしょう」

「強硬手段とは？」

「つまりお客さんをあの家から追い出すことです」

「どうやって？」

すると居酒屋の主人は、にやっと笑って、「蜂ですよ。日本蜜蜂とかいう蜂です。船頭、つまり私の連れの話では、空穂坂の次男坊には特殊な才能があって、日本蜜蜂を自由に操ることができるということです。猛獣使いのように」

柿ノ倉は農業青年の話の思い浮かべた。青年の話でも、男が片手を振り回して、イチゴハウスの蜜蜂を一斉に自分の体に集めたと言っていた。

「で、その蜜蜂を使ってどうするというのだね？」

「お客さんの体を攻撃させるんですよ。蜜蜂と言えども、カタマリとなって襲ってきたら、そりゃー恐ろしいもんですぜ。しかしそれは、お客さんが稲山田と関係する人間であった場合です。まったくの他人でしたら、そこまではしないと思いますが、用心するに越したことはありません」

「そうかね。私にはとても親切な人間に見えるのだが」

「親切ですよ。悪い人間ではありません。ただ稲山田の人間に対しては鬼のようになります。私もあの家が売りに出されていたとは最近まで知りませんでした。空穂坂も知らなかったのです。知っていればあの家を購入したでしょうから。もちろん稲山田が空穂坂の人間にあの家を売ることはないでしょうから、誰か知っている人に頼んで購入したはず。それくらいの余裕はある家です空穂坂は。稲山田があの家を売りに出したのは、さっきも言いましたが、無人のままにしていたら、いつか空穂坂があの家を勝手に搜索するのではないかと心配したからです。もっとも、これは私の推測に過ぎないのですが」

「今、搜索と言われたが、ではあの家には何かが隠されているということかね」と柿ノ倉は、あえてとぼけてそう聞いた。

「ええ」

「で、それは？」

「ですから……あまり大きな声では言えないですが、船頭の妹ですよ」

「その遺体ということかね？」

「ええ……このことは絶対に他にいつて言わないようにしてくださいよ。お客さんがあの家で暮らしているから特別に言っているだけで、極秘中の極秘なんですから。もしもこのことが稲山田に知られたら、私はただではすみません。私はあの長男をよく知っています。狡猾で陰険な男です。自分の見栄と欲望だけで生きているゲスな野郎です」

「しかし、気味の悪い話だね。あの家に遺体があるだなんて。そんなことを言われたら、私はたった一人で暮らしているのだから、夜怖くて寝られないじゃないか」と柿ノ倉は言いながら、頭の中では、あのキッチンの床を思い浮かべていた。

「これはどうも余計なことを言って、悪かったです」と主人は頭を下げた。

「いや、余計なことではない。むしろ感謝している。だが、マスターが言うのが本当なら、なんとかしないといけないね」

「ええ。で、そのなんとかとは？」

「決まっているじゃないか。家宅捜索だよ」

「警察に言うわけですか？」

「いや、自分でやってみる。どうもキッチンの床下が怪しい感じがするんでね」

「だったら船頭と空穂坂に頼みましょう。彼らもそれを願っているわけですから」

「なるほど、それが一番いいだろう。私もスコップはまだ買ってないし、楽しい作業ではないからな。彼らにやってもらいたい」

「じゃあ明日早速彼らに連絡を取ってみますよ」

「頼むよ。私もこのままでは安心して暮らせないからね。一日でも早く決着をつけたい」

「こちらも同じです。ひょっとするとお客さんは、私どもにとっては、福の神かもしれません。いやまあ、チャンスを与えてくれたということで。しかし、結果は残念なことになるかもしれません。複雑なところですよ。とりあえず明日か明後日、空穂坂がそちらの家に伺うと思いますので、そのときに話し合ってください」

柿ノ倉は、この居酒屋に来て大正解だと思った。もしも来なければ、ずっと稲山田の犯罪を隠す一員となっていただろうから。もっとも、本当に船頭の妹が、我が家に秘匿されているかどうかまだ分からないのだが。

やがて焼き鳥も食べ終わって、柿ノ倉は満足して居酒屋を出た。ところが、店の引き戸を開けた瞬間、誰かが慌てて走り去っていった。すぐに夜の闇に紛れたので、はっきりとは見ていないが、先ほど店にいたカップルの男性に似ていたように柿ノ倉は思った。まさか、自分たちの会話を店の外で盗み聞きをしていたのではないだろうか。二人だけの世界に浸っていたように見えたのだが、あのときも、ひょっとすると柿ノ倉たちの会話にこっそり耳を傾けていたのかもしれない。だとすれば、あのまま席に座っていれば良かったのだろうが、それだと店の主人は極秘の話を柿ノ倉にしなかつただろうから、それで店を出たのかもしれない。

もしそうだとすると、今後まずいことになりそうな予感が柿ノ倉はした。

近くで車を急発進させる音が聞こえてきた。

14

家に戻る途中、車を運転しながら柿ノ倉は再び考えた。あの若者が稲山田に属する者で、柿ノ倉と店の主人の会話を盗み聞きしていたのなら、必ず稲山田に報告するだろう。なぜなら、稲山田とまったく関係ない人間が店の外で盗み聞きをする必要がなく、またそれは、柿ノ倉にとって命の危険を意味していた。というのもあの家は、稲山田が家の秘密を保持するために、独り身の柿ノ倉に売ったのであり、その柿ノ倉自身が家の秘密を暴こうとしているのを、黙って見ているはずがないからだ。必ず妨害をしてくるだろう。それも早急に。

家に戻ってドアを開けると、柿ノ倉はふと、この家の鍵は大丈夫だろうかと考えた。不動産屋から引き継いだ鍵のままなのだ。鍵を新しくする必要があるだろう。年金生活者にとって、手痛い出費になるが、鍵という鍵は全部明日替えよう、と柿ノ倉は決心した。しかし、それよりも今夜が一番危険なように感じた。なぜなら、空穂坂は明日この家に来るかもしれないのだ。稲山田としては、それよりも早く手を打つ必要があるだろう。

そこで柿ノ倉は、こう推理した。――稲山田が、自分たちの企みを阻止する方法は、空穂坂を自分に会わせないようにすることだ。そのためには自分を監禁するか連れ去るか、しないといけませんが、しかしそれはその場しのぎであって、結局、自分を始末するしか方法はないのではないだろうか。

居酒屋の主人が、この家は呪われた家で、用心しろと言ったのは、つまりこういうことだったのか、と柿ノ倉はため息をついた。

その夜、柿ノ倉はなかなか寝付けなかった。そして、それは正解だった。というのは、二階の寝室で横になっていた柿ノ倉の耳に、玄関のドアが開く音が、かすかに聞こえてきたからだ。柿ノ倉はすぐに起きた。こうなることを頭のどこかで予想していたのだろう。普段着のジャージに着替え、寝室のドアの横に立った。この部屋のドアも用心のために鍵はしているが、もともこの家の構造を知っている人間にとっては、これぐらいは簡単に開けてくるだろう。

足音は階段に近づいた。階段を上がる音で、どうも二人いるようだ分かった。彼らがこの時間帯、不法侵入して来る目的は、もちろん、柿ノ倉の命を奪うことである。柿ノ倉は自覚し、その場に低く構えた。

静寂の中で、部屋のドアノブがガチャガチャ鳴らされた。このとき柿ノ倉はためらった。それはドアノブを内側から持って開けさせないようにするのか、それともすんなり開けさせて、彼らが部屋の中に入った瞬間を狙って自分が外に飛び出すか、という選択だ。ドアノブを持って開けさせない方法は、時間の問題となるだろう。なぜなら相手は二人いるわけだから、綱引きで勝てるわけがなかった。そこで柿ノ倉は後者を選んだ。

間もなくドアがすっと後ろにひかれて、懐中電灯の明かりがさっと部屋の中に差し込んだ。一人目の男が部屋に入って来た。続いて二人目も部屋の中に入ろうとしたそのとき、一人目の持っていた懐中電灯の明かりが、柿ノ倉を捉えた。瞬間、それっ、と柿ノ倉はドアのところに立っていた二番目の男を突き飛ばして、階段を駆け下りた。暗がりの階段で、段を踏み外しそうになったが、ここで転がって足でもくじいたら、柿ノ倉は彼らに捕まっていただろう。

玄関の靴を履くとき、そこにあった男たちの靴を蹴飛ばして、外に飛び出した。そして、林の中に逃げ込んだ。二人の男もすぐに家の外に出て、柿ノ倉のあとを追ったが、周りは暗い林だから柿ノ倉がどこに逃げ込んだのか分からないようだった。柿ノ倉は木の陰で、じっと二人の様子をうかがった。

二人の持っている懐中電灯の明かりが、あちらこちらを照らしていた。彼らが近づけばまた遠くに逃げるだけだが、そうならないように柿ノ倉は神に祈った。こういう暗い林の中では逃げる者が、どうしても不利になる。逃げる者は前方を手探りで進まなければならないうえに、木の枝に服が引っかかったりして、猟犬のように追ってくる者に追いつかれてしまうからだ。

幸いなことに二人は、しばらくして諦めたようだった。探すのが広範囲だったせいもあるだろうが、柿ノ倉が意外と機敏だったことで、たとえ見つけたとしても、そう簡単には捕まえることができないと判断したからだろう。実際、手に持っている懐中電灯は、柿ノ倉を捕まえるときに邪魔になるし、叩き落とされれば、手探り状態になる。それに加えて柿ノ倉が、何か武器を持っているかもしれないのだ。林の中なら、武器になるものはいくらでも手に入る。木の棒はもちろんのこと土でも小石でも立派な武器になるだろう。

二人は車の通る道を去っていった。柿ノ倉は一先ず安心したが、用心して家には戻らないことにした。

しかしながら、朝になるにはまだ時間があった。そこで柿ノ倉は、あの養蜂家組合の青いテント小屋に行ってみることにした。じつは柿ノ倉の着ているジャージのポケットに、小さな懐中電灯が入っている。これはいつも夜トイレに行くときに使用しているのだが、先ほど玄関の靴を履くときも、これで照らして履いたのだ。ただ林に隠れるときは使わなかった。月明かりだけでなんとかなったからだ。しかし、あの二人が遠くに去った以上、もう使ってもいいだろう、と柿ノ倉は目の前の地面を照らして歩いた。

柿ノ倉は、用心して車が通る道は避けて、獣道のようなところを歩いた。そうして、あのテント小屋に近づいたとき柿ノ倉は驚いた。テント小屋に明かりが灯っていたからだ。まさか先ほどの二人がいるのではないかと思ったが、彼らが去っていった方向とは真逆であったので、それはないだろうと心を落ち着けた。とはいえ柿ノ倉は、なかなか小屋に近づくことができなかった。それは線香の匂いが漂ってきたからだ。こんなところに墓場はないだろうし、ましてやこんな真夜中にお参りをするものもないだろう。なぜなのだ。するとやがて、小屋の中からあの養蜂家組合の男、つまり空穂坂の次男坊が現れた。それで柿ノ倉は安心して近づいた。

空穂坂は、人が近づく音と懐中電灯の明かりにギョッとしたようだった。こんな時間に誰だ、と思ったのだろう、棒のように突っ立っていた。

それで柿ノ倉は、自分から声をかけた。

「こんな時間にまだ仕事をしているのかね？」

すると空穂坂はほっとしたようだった。

「ああ、あなたでしたか。驚きましたよ。あなたの方こそ、こんな時間に何でここへ？」

そこで柿ノ倉は、これまでの経緯をすべて話した。

「そうでしたか」と空穂坂は感慨深げに言った。「その二人は間違いなく稲山田に属する人間です。あなたが寝ないで起きていたのは大変幸運と言えます。でなければ、今こうしてわたくしと話をすることはできなかつたでしょう。それであの家の床下を調べるということでしたが、ぜひこちらにお任せ下さい。それがかねてからの願いでしたから」

「頼むよ。それもできるだけ早くしてほしい。でないと、安心して過ごせないから。警察に通報するつもりだったが、ここでちょうどあなたに会えたので、通報するのはあなたが調べた後でもいいかなと。それに不法侵入というだけで警察が床下を調べるかどうか分からないからね」

「さようでございます」と空穂坂は、急にかしこまって言った。「というのも、この辺の警察の中には稲山田に属する人間が何人もいまして、稲山田に関わることは、まともに取り合ってくれない恐れがあるのです。実際あのときも——いえ、船頭さんの妹さんがこの高台で行方不明になったときのことで、稲山田の長男と船頭さんの妹さんが一緒にいて、それを目撃した人がいるにもかかわらず、警察は稲山田の別宅を調査しませんでしたから」

「家の鍵は今日中に替えるつもりだが」と柿ノ倉は言った。「しかし、またいつどこで彼らに捕まるか分からない。日課の散歩も、できやしないよ」

「ですから、今日のお昼ごろ、わたくしは船頭さんを連れて、そちらにお伺いします」

「助かるよ。だが、それはいいとして、夜が明けるまで、この小屋の中で匿ってくれないだろうか。今、家に戻っても、またあの二人がやって来るような気がして、とても不安なんだ」

空穂坂は、しばし戸惑ったようだが、やがてうなずきながら、「いいでしょう。あなたもお困りでしょうし、それにあなたならこの秘密を人に言ったりしないでしょから、どうぞ入ってください」

「ありがとう」

柿ノ倉は、空穂坂が秘密と言った言葉に引っかかるものを感じたが、うれしかった。それにしても線香の匂いが一段と強くなっていた。以前からこの小屋の中が気になっていた柿ノ倉は、より一層の興味を持って小屋の中に入った。

大きなランタンの明かりで小屋の中は照らされていた。小屋の奥に祭壇が設えてあり、そこに遺影が置かれていた。まだ若い女性だった。どことなく顔立ちが空穂坂に似ていた。その遺影の前で、線香の煙が立ち上っていた。

空穂坂は言った。

「わたくしの妹ですよ。今日がその命日です。正確には昨日でしたが、わたくしは毎年その日は夜通し、こうして線香をたいて供養をしているのです」

柿ノ倉は、どう言っているのか迷った。

「さあ、ここに座ってください」と空穂坂は、ブルーシートの上にある座布団を指差して言った。周りには蜂の巣箱もたくさん置いてあったが、蜜蜂は箱の中で眠っているのか静かだった。あるいは空箱だったのかもしれない。なぜなら、線香の煙に燻されて、じっとしているのはオカシイからだ。

「眠たければ横になってもかまいません」と空穂坂は言った。

「いや、それより話を聞かせてもらえないかね」と柿ノ倉は言った。

「妹のことですか」

「ええ」

「ですからそれはこの前お話ししたように、稲山田の次男坊にあの崖から突き落とされて、それでわたくしはここに小屋を建てて、妹の霊を祀っているのです。よく事故現場に手向け花をしましょう。それと同じ理屈です。また養蜂家組合を設立するにも、ここはちょうど良かったのです」

「それだけではないね」と柿ノ倉は言った。「私は港の近くの、ある居酒屋で、その亭主から話を聞いたのだが、あなたと釣り船の船頭さんは稲山田を脅すために、毎日あの崖の上で、合図を出し合っているというじゃないかね」

空穂坂は、声を出さない薄気味の悪い笑い方をした。

「そこまでご存知でしたか。最初あなたを見たときから、ちょっと普通の人と違うと感じましたが、やはりわたくしのカンに狂いはありませんでした」

「どういう風に違うのだね」

「いえ、ですから悪い意味ではありません。普通の人を考えないようなことをあなたは考えることができる、という意味です」

柿ノ倉は、小説を趣味で書いているが、確かに普通の人を考えないようなことをいつも考えている。空穂坂は、そういったことを最初に会ったときに直感したのだろうか。反対に柿ノ倉も、最初に空穂坂を見たときに、やはりなんとなく普通と違うように感じたが、それは養蜂家組合という聞きなれない言葉があっただけではなく、空穂坂の体から発する霊気のようなものを感じたからだろう。蜜蜂を自分の思いのままに操ることができるのは、単にローヤルゼリーを服につけているだけではないように思った。

「また」と柿ノ倉は言った。「船頭さんの妹さんを捜索するためにここに拠点を構えたわけだね」

空穂坂は、処置なしといった風に、

「ええ、そのとおりです。彼の妹は、間違いなくこの辺りに眠っています。この高台で行方不明になり、他にいった形跡がないですから。もちろん現在あなたが住まわれている屋敷が、一番怪しいのですが……」

「あの家は呪われた家だと居酒屋の亭主が言っていたが、まさにそのようだ」

「なに、ご心配はいりませんよ。あの家の床下を調べれば、すべてが分かるでしょう。そうして、もしもそこに船頭さんの妹が見つければ、あなたは稲山田がやっている不動産屋に文句を言って家を買戻しさせればいいでしょう。従業員は知らないかもしれませんが、しかし社長は、そのことを知っていて、わざと他人に売ったわけですから、断ることはないと思います」

「いや、家自体は気に入っているんで、お祓いをしてすませるつもりだよ」

「そうですか。やはりあなたはちょっと変わっていますね。わたくしが思うに、あの家は稲山田兄弟の遊び場だったのです。あの兄弟は代々続いた家系の中でも、とりわけ好色だったようで、よく女をあの家に連れ込んでいたようです。船頭さんの妹もその中の一人で、何かの事情で殺害したのでしょうか。稲山田の長男は、すぐカッとなる人間ですから」

「となると、これはますます気を付けないといけないね。今夜その手下が二人私を殺しに来たのだが、この後、もっと人数を増やして来るような気がするよ」

「朝になれば大丈夫です。わたくしのそばにいれば、蜂が守ってくれますから。しかし、暗い内はさすがに蜂も目が見えませんが、わたくしもどうしようもありません」

柿ノ倉は、変なことを言うものだなあ、と思ったが、聞き返しはしなかった。おそらく蜂の巣箱をひっくり返して、それで相手が近づくのを防ぐつもりなのだろう。しかし、それでは蜂に慣れた空穂坂はいいが柿ノ倉にとっては恐怖でしかない。だがそれも、空穂坂がなんとかやってくれるような気もした。

柿ノ倉は、最初にこの空穂坂を見たときの印象からすると、かなり変わってきていた。養蜂家組合のパンフレットを持ってきたときは、なんとなく胡散臭いイメージだったのが、しだいに好意を持つようになり、そして今は頼りにするほどになっていた。親子ほど歳が離れているのだが、この男がそばにいただけで妙に安心感があった。それで柿ノ倉は、夜が明けるまで小屋の中でぐっすり眠ることができた。空穂坂も、ゴザの上に横になってうとうととしていた。昼には、あの家の床下を掘り返す重労働が待っているのだ。体を休めておく必要があった。

柿ノ倉が目を覚ましたときには、空穂坂は小屋にいなかった。外はすでに明るくなっていた。ランタンの明かりも消えていた。柿ノ倉は小屋の外に出て辺りを見回したが、空穂坂の姿は見えなかった。家に帰ったのかもしれない。柿ノ倉も家に戻りたかったが、しかし、あの二人が家で待ち構えているような気がして戻れなかった。また二人ではなくもっと大勢で待ち構えているような気がした。なぜなら、稲山田としても、もう引くに引けない状態になっていて、総動員で来るに違いないからだ。また稲山田は、柿ノ倉が警察に駆け込むのを怖れているはずで、その前に捕まえようとするだろう。たぶんこの周辺の交番や警察署の近くに見張りを置いているのではないだろうか。もっとも単なる家宅侵入だけでは、稲山田に疑いが掛かるわけではない。実際、犯人が誰なのか分かっていないのだから。しかし、あの居酒屋で柿ノ倉がした会話———家の床下を調べるといふのを稲山田が耳にしていれば、それをさせないために手を施すだろう。それはつまりあの家の持ち主である柿ノ倉を抹殺することに他ならない。養蜂家組合の男つまり空穂坂の次男坊も、やはり稲山田から命を狙われることになるだろうが、空穂坂は、以前からそのことを自覚しているのか、小屋の中に一本の木刀が置いてあった。空穂坂も身の危険を感じていたのだ。そのことから柿ノ倉は、空穂坂が日本蜜蜂の巣箱をあちこちに設置しているのは、ひょっとすると自分のボディガードの役目をさせる意味もあったのではないかとさえ思えてきた。

ふと柿ノ倉はあの崖へいってみる気になった。稲山田の屋敷が、今どういう状態なのか知りたくなったのだ。

崖に近づくと、朝の爽やかな風が海の方から吹いていた。

柿ノ倉は近くの木々の間に身をかがめて、こっそり稲山田邸を伺った。

すると、稲山田の屋敷では四人ほど庭に出て何か立ち話をしていた。その中に不法侵入した二人がいるのだろうか、柿ノ倉は目を凝らしたが、分からなかった。

この前見た体格のいいサングラスをした者が、稲山田の大将のようだった。その大将が、突然、こちらを向いて崖の方を指差した。他の三人も一斉にこちらを見た。柿ノ倉はドキっとした。見つかったのかと思ったが、そうではなかった。たぶんこの崖のそばにある空穂坂のテント小屋を指し示したのだろう。そこに柿ノ倉がいるのではないかと噂しているのではないだろうか。ということは、まもなくこっちに来るといふことなのか。柿ノ倉は、ぞくぞくと寒気がした。空穂坂がそばにいてくれればと、このときほどあの小男が頼りに思うことはなかった。

これからどうしようかと考えながら、柿ノ倉は静かにその場を離れた。テント小屋に戻ったとき、嬉しいことに空穂坂がこっちに戻って来るのが目に映った。手に何か提げていた。

空穂坂は言った。「コンビニで朝食を買ってきましたから、一緒に食べましょう。サンドイッチとおにぎりだけです」

「それは大変ありがたいが、それよりも私はたった今、あの崖から稲山田の屋敷を見ていたのだが、すると大の男が四人庭に出て立ち話をしていた。その中で、サングラスをした男が突然崖の方を指差して何かしゃべっていたから、それはたぶん私がこのテント小屋に隠れているのではないかと話をしていたのに違いないのだ。だからここにいるのは非常に危険だよ。私はこのテントの中で木刀を目にしたので、これを拝借しようかと戻ってきたのだが——で、木刀を貸してもらえるかね」

「ええ。どうぞお使いください。もう明るいですから、わたくしには必要ありません。とにかく食事をしましょう。腹が減っては、戦はできないと言いますからね。小屋の外なら、誰か来れば、すぐ分かります」

そこで、二人は小屋の前にシートを敷き、まるでピクニックのように辺りの様子を見ながら食事を取った。

食事を終えた頃に、危惧していたことが起こった。稲山田の連中がこっちにやって来たのだ。サングラスの男を先頭にして、先ほど稲山田の庭で見た三人が後に続いていた。まだ遠い距離だったが、空穂坂はさっと立ち上がった。

「奴らに捕まってはただではすみません。さあ逃げましょう」

「逃げる？」

柿ノ倉はポカンとした。逃げるのなら何でこんなところにじっとしていたのか。柿ノ倉は少しむっとしたが、しかし、空穂坂の指示に従った。

「こっちです」

空穂坂は言って、獣道のようなところを走った。柿ノ倉もその後をついて走った。当然ながら、稲山田の連中もそれに気づいて追いかけて来た。

林の中にぽかんと開けたところがあった。そこに空穂坂は逃げ込んだ。地面が岩で、それで樹木が育たなかったのだ。おかげで太陽が燦々と降り注いで、無数の巣箱が、そこらじゅう置かれていた。ここが養蜂家組合の一大拠点なのだろう、と柿ノ倉は思った。

空穂坂は広場の真ん中で立ち止まると、すぐにオオオーという叫び声とともに、片手をぐるぐるとものすごい勢いで振り回し始めた。するとどうだろう、周辺にいた蜜蜂が一斉に飛び立って、空穂坂の頭上に集まり始めたのだ。それはまるで黒雲のようであった。さらに蜜蜂はこの地域一帯からも、どんどん空からやって来た。すさまじい羽音だった。

空穂坂は片手を高く伸ばしていたが、もう一方の手で柿ノ倉に自分の後方にいるように指示した。柿ノ倉が空穂坂の後ろに控えると同時に、稲山田の四人組がこの広場に現れた。手にロープを持っている者もいた。それで柿ノ倉を捕らえるつもりなのだろう。しかし、稲山田にとって、空穂坂がいたことは誤算だったかもしれない。あるいはそれも計算に入れていて、空穂坂も一緒に料理するつもりで来たとなれば、稲山田の決心も相当なものに違いない。そして、それが本当なのだろう。なぜなら、稲山田自身がやって来たというのは、切羽詰っていることを意味していたからだ。実際、自分の過去の犯罪が今日暴露されるかどうかという瀬戸際に、じっとしてられるわけがなかった。またそれだけではなく、日頃、空穂坂から受けている脅迫の、その報復も兼ねていたのだろう。

「稲山田さんよ」と空穂坂が先に言った。「あんたがここに来た理由はちゃんと分かっています。これ以上近づくと、命の保証はできませんよ」

「何を抜かすか、この小倅が」と稲山田が返した。問答無用といった感じで、「おい、やってしまえ！」と子分たちに命じた。稲山田はサングラスをしていたから、空穂坂の頭上に待機していた蜜蜂の大群に気づけなかったようだ。しかし、子分たちは、蜜蜂が黒雲のようになって日光を遮断しているのを目にしていた。それで躊躇したが、親分の命令に背くわけにもいかなかった。仕方なく前に進む形となった。

と、「それ行け！」と空穂坂は号令を発し、天に伸ばしていた腕を四人組に向けて振り下ろした。すると蜜蜂の大群は、まるで爆撃機のような轟音をさせて四人の方に飛んでいった。

あっという間に四人は、顔中蜂だらけになった。手で払っても払っても蜜蜂が群がってきた。目を開けることができない状態になっていた。稲山田もやっとここにきて事情が飲み込めたようだ。サングラスをとって目に集まる蜜蜂を取り去ろうとするのだが、無駄な抵抗だった。蜜蜂が次々と目の周辺に集まるのだ。もちろん顔や手は蜜蜂に刺され放題で、すぐに赤く腫れてきた。そればかりか息をするのも困難な状態になっていた。口を開ければ蜂が入り、鼻の穴さえ入り込もうとするからだ。

「分かった分かった」と稲山田が、やがて、うずくまって声も絶え絶えに言った。何が分かったのか判然としないが、空穂坂は「戻れ！」と号令を発した。すると蜜蜂の群れは、また一斉に空穂坂の頭上に集まった。

空穂坂としては、稲山田を殺すつもりはないのだ。妹ななみの復讐は、すでに終わっているからだ。もちろん稲山田の出方によっては、再び蜜蜂に攻撃させる考えはあったが、しかし、その必要はなかった。顔中蜜蜂に刺された稲山田が、とつぜん倒れたからだ。アレルギーを起こしたのだろう。顔を赤く張らした子分たちも、これにはあわてふためいた。とても柿ノ倉たちにかまっていられなくなった。で、三人は稲山田を担ぐと、またもと来た方向へ戻っていった。おそらく車が通る道まで運んで、そこから自分たちの車で病院に運ぶか、あるいは救急車でも呼ぶつもりなのだろう。

柿ノ倉は、ほっとした。と同時に空穂坂という、何の変哲もない小男に、畏敬の念を持った。空穂坂の頭上には、まだたくさんの蜜蜂が待機していたが、「解散！」と空穂坂が声をかけ手を左右に振ると、蜜蜂の群れは一斉にちらばった。遠くから来た蜜蜂は、また空高く飛んでいった。

柿ノ倉は、稲山田という指揮官を失った子分たちが、自分に対して何かをするというのは、ちょっと考えられなかった。それで、自分も家に帰ることにした。

「そうですか」と空穂坂は言った。「昼前に船頭さんと一緒にそちらにお伺いしますから、それまでお気をつけて家にいてください。たぶん奴らもおとなしくしているでしょう。稲山田の命令で動く連中ですから、その稲山田が倒れた以上、手出しはしないはずです」

16

昼前、約束通り空穂坂が船頭の車に乗ってやって来た。車にはスコップだけではなく、床を切る道具なども積んでいた。工事現場で使う大きなライトも用意していた。

船頭は柿ノ倉に対して頭をさげて、「この度は妹の件で、ご迷惑をおかけすることになり、大変申し訳なく思っています」と言った。

「いやそれより、一刻も早く調べてもらいたい。はっきりしたことが分かれば、彼らも諦めて、何もしなくなるだろうから」と柿ノ倉は言った。

「長年の苦労が今日報われるかもしれません」と今度は空穂坂が言った。「その反面、わたくしたちの推測が間違っていてほしいという、複雑な心境です」

船頭が続けて、

「どこかで生きていてくれたらとずっと願っていましたが、それも今は諦めて、ただ妹を早く見つけ出したいという思いが強いのです」と目に涙をためて言った。このとき柿ノ倉は気づいたのだが、船頭はこの前のサングラスを掛けていなかった。床下を調べるのに、サングラスは邪魔になるからだろう。

早速、柿ノ倉は家の中を案内した。キッチンの床がリフォームされた形跡があり、ここを一番に調べてほしいと柿ノ倉は言った。

そこで船頭たちは、電動カッターを使いキッチンの床材を切った。船頭は船の扱いだけではなく、こういった作業も手馴れていた。施設を手伝っているということは、便利屋のようなこともしているのだろう。この船頭がいつから知的障害者の施設で働いているのか分からないが、たぶんそれは妹の搜索を空穂坂に依頼してからではないだろうか。空穂坂と連絡を密に取る必要があったからだ。釣り船による稲山田に対する脅迫も、あるいは元漁師の発案だったのかもしれない。というのは、漁師の妹であるということを稲山田に悟らせる必要があったからだ。

さて、搜索の結果は、柿ノ倉たちが推測したとおりであった。そのことをここに詳しく書くつもりはない。読者が適当に想像されたいと思う。たぶんその想像であっていると思うから。

柿ノ倉にとっては、それからの数日間は地獄のようなものだった。せつかくの静寂が、連日警察とマスコミ関係者によって蹂躪されたからだ。とてもこの家に住んでいる状態ではなかった。その様子を見て、空穂坂がすぐに助け舟を出した。自分の家に開いた部屋があるから、しばらくそこで暮らしたらいいと。柿ノ倉はその船に乗った。

さて、稲山田があれからどうなったかと言え、一命は取り留めたものの、自由の身にはなれなかった。過去の犯罪がすっかり暴露され、稲山田自身も観念して自供したからだ。

高台が落ち着いた頃、柿ノ倉は家に戻ったが、やはり家も庭も荒らされていた。まずキッチンの床を何とかしなければならぬが、幸いなことに空穂坂と船頭がリフォームを手伝うと言ってくれた。費用も要らないと。

そんな中、稲山田の不動産屋が、社長の指示でこの家を購入金額に色を添えて買い取ると言って来たが、柿ノ倉は断った。あの社長も少しは心が変わったようだ。しかし柿ノ倉は、この不吉な家が妙に気に入っていた。それは、単に眺めがいいというだけではない。自分の子供のような若者たちが、この家で他界したことが、定年退職をした柿ノ倉の孤独を癒す慰めとなっていたからだ。

しばらく経って、空穂坂が来た。蜂の巣箱の点検に来たのかと思ったら、柿ノ倉にこう言った。「この度、大変勝手ではありますが、養蜂家組合を解散することになりました。その理由はと申しますと、一つの目的が達成し、またわたくしの体もここにきてガタが来たようですから。——ええ、まあ、あの船頭さんが代わりにできないわけではないのですが、あれ以来ショックで、その気力もないようです。やはり昔の漁師に戻りたいようですから、こちらも強いて頼むこともできません。幸いなことに日本蜜蜂は年々増えていまして、もうわたくしが世話をしなくても大丈夫なようです。農家の人たちには、すでに説明をして、巣箱を引き取ると言いましたが、自分たちで今後世話をするからそのままにしていってほしいと言うことで、こちらも助かりました。で、ご主人様の方ですが、いかがでしょうか、わたくしがあの巣箱を引き取りましょうか、それとも——」

「いや、私が面倒を見るよ」と柿ノ倉は、即座に答えた。「まだハチミツも食べていないし、全然邪魔にならないから」

空穂坂は笑顔で、「さようございませうか、こちらとしましてもありがたいことです。それとハチミツの方は、今日採取することにいたしましょう」

「そうかね、頼むよ。やり方を見ておく必要があるからね」

すぐに空穂坂は引き返し、空き瓶とヘラの入った袋を提げて戻って来た。

柿ノ倉は庭に出て空穂坂のやることを観察した。蜜蜂は巣箱の周りにたくさんいたが、空穂坂は仕事がかしやすいうようにと例のやり方で、蜜蜂を集合させて、近くの立ち木にとまらせた。そうして、柿ノ倉に説明をしながらハチミツを採取した。

ガラス瓶に琥珀色のハチミツがたまると、それを柿ノ倉に手渡して、「蓮華草のハチミツですから、格別な味がいたしますよ」と言った。

柿ノ倉は、礼を言ってそれを受け取ると、「どうかね、コーヒーでも一緒に飲んでいかないかね。ハチミツを入れたコーヒーがどんなものか試してみようと思っているんだよ」

「それはもちろん美味しゅうございます。しかし、わたくしは他にもまだ行くところがございますので、この辺で失礼をさせていただきます。ではご機嫌よう」そう言うと空穂坂は去っていった。

柿ノ倉は、淋しいような嬉しいような複雑な気持ちで、それを見送った。空穂坂と今後めったに会うことはないだろうというのは淋しいことで、手に持っているハチミツが今後ずっと定期的に手に入るというのは、嬉しいことだったのだ。

柿ノ倉はキッチンで湯を沸かし、リビングでコーヒーを作った。そして、採れたてのハチミツをスプーンですくってコーヒーに入れた。独特の香りが漂った。

ひょいと窓の外を見ると蜜蜂がのんきに飛び回っていた。柿ノ倉は、先ほどの空穂坂がやってみせた蜜の採取方法を頭でなぞった。今後、自分でそれを行う必要があるのだ。しかし、ふと気になることを思い出した。それは頭に被るネットである。どこで売っているのだろうか。ホームセンターで売っているのだろうか。空穂坂は特殊な人間だから、ネット無しでも問題なかったが、柿ノ倉は普通の人間だから、ネット無しではとても怖くて巣箱を触ることさえできないのだ。

今度ホームセンターへ行って探してみよう。無ければ、あのブルーベリーの青年のところへ行って聞いてみよう。というのも、青年も今後、自分で蜜の採取をすることになるのだし、農業関係者だから、きっと何か教えてくれるに違いない。たとえ、どこにも売っていなければ自分で作ってもいい。麦わら帽子に網戸のネットを被せればいいだろう。革の手袋をして厚目のカップを着れば問題ないはずだ。

一安心して柿ノ倉は、コーヒーカップを口に近づけた。まずは香りをかぎ、それから一口、口に含むと、思わず目をつぶり、そして、ゆっくりと飲み込んだ。

了